あなたへ　真実からの伝言

―感動と生きる喜びを―

平和の礎（いしずえ）

交野在住者戦争体験集

発刊にあたって・・・

この小冊子は、

公募に応じられた交野市在住の戦争体験者の寄稿と聞き取りを

収録したものです。

平和日本の礎となられた多くの御霊に捧げ、

あなたを始め現在・未来を生きるかたがたにお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

（会長　可児義明）

「６０周年記念小冊子　平和の礎」の
発行にあたって

交野市長　　中田　仁公

戦後６０年の節目にあたり、戦争を体験された人達の声を「平和の礎」として冊子にされたことは、たいへん意義あることであると考えております。

戦争を知らない世代が増えている今日、戦争の記憶は風化が進むばかりです。戦争の悲惨さ、平和の尊さ、また被爆国として核兵器の恐ろしさを次の世代に語り継ぐことは、非常に大切な事です。

本市は、平成１３年１１月に「平和と人権を守る都市宣言」を決議し、平和祈念の夕べの開催等、平和の大切さを知っていただくための事業を市民の皆さんと協働で展開してまいりました。

本年３月には、偶然にも６０年前の７月に交野市上空で米軍機に撃墜された戦闘機「飛燕」の残骸が、星田北の第二京阪道路建設現場から発見されました。いきいきランド交野で公開させていただいております出土品は、飛燕に搭乗しておられた中村純一中尉が私達に宛てた平和への大きなメッセージではないでしょうか。

恒久的な世界平和への道筋は、国家間の利害という厚い壁により依然として不透明ではあります。しかし私は、私達一人ひとりの平和への願いや取り組みが、国や国際世論を動かす大きな原動力になると信じ、今後とも市民の皆様と共に取り組んでまいります。

結びに、本書の発行にあたりご尽力をいただきました「交野市平和と人権を守る都市宣言を進める実行委員会」の皆様方、ならびに体験談の原稿や貴重な資料を頂戴しました皆様方に厚くお礼申し上げます。

「平和の礎」発行を機に、平和への願いの輪がさらに大きく広がることを祈念いたします。

「６０周年記念小冊子　平和の礎」の
発行にあたって

交野市議会　　議長　岩本　健之亮

「平和」の意味を広辞苑で引きますと、平らにやわらぐこと。穏やかでかわりのないこと。戦争がなくて世が安穏であること。とあります。

戦後６０年、日本国民の知恵と努力により、今の繁栄が有り、安心で安全な私たちの暮らしがあります。しかし、中東やアフリカの諸国では民俗等の違いから、今なお悲惨な紛争やテロ事件が頻繁に起こり、目を被いたくなる場面が報道されております。その上、その犠牲者が幼い子供達であり弱い女性達である事に強い憤りを感じるのは私だけではないと思います。

平和に向けた活動は、国連等に委ねるだけでなく、私達一人一人が命の尊さ、平和の尊さを再認識し、それぞれの立場で身近なところから行動を起こす事が重要と考えております。

本市は平成１３年１１月に「平和と人権を守る都市宣言」が制定され、平成１６年３月には、人権尊重のまちづくりの推進について、人権施策を総合的に推進し、平和で豊かな明るく住みよいまちをめざすために「交野市人権尊重のまちづくり条例」が制定されました。

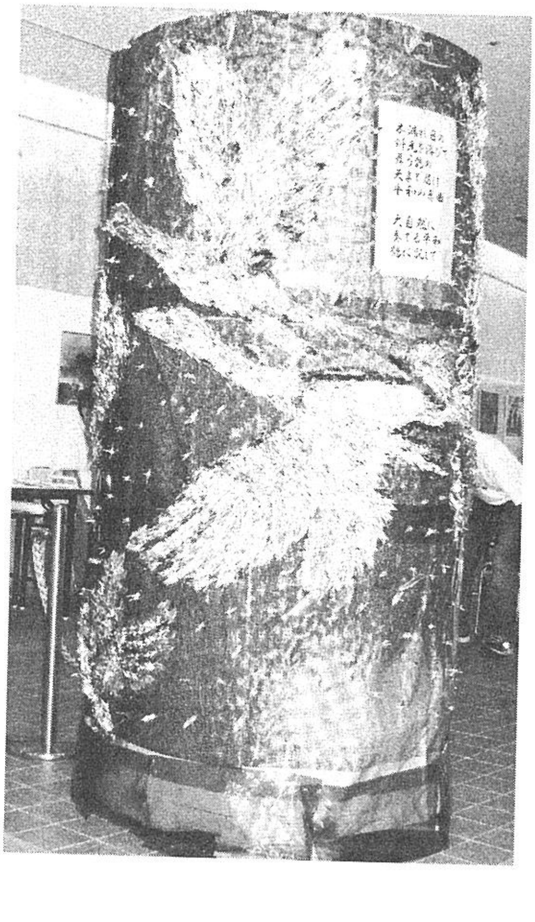
第３次総合計画の中で、豊かな山地自然の恵みと、歴史ロマンのあふれる“いつまでも住みつづけたい”と思える、「水と緑が暮らし彩る『星のまち☆かたの』」を将来像として定めており、その実現に向けて、まちづくりの基本方向として「快適で安心して暮らせるまちづくり」があります。私もこの目標に向かって、微力でありますが頑張ってまいりますので、皆様の一層のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

目次

発刊にあたって	
ごあいさつ　交野市　市長　中田仁公	
ごあいさつ　交野市　市議会議長　岩本健之亮	
▽寄稿（五十音順　敬称略）	
北田陸夫（私部）わたしの昭和前半時代	5
古賀好松（倉治）原子爆弾被爆の日	9
渋谷正（青山）私の終戦記録	13
内藤弘（倉治）熟年のひびき「ふるさと山河」	17
中西英雄（私部西）私の幻の青春時代	21
西田悦子（私部）苦難の道　私の半生記	26
丸田道子（私部西）大阪大空襲と私	32
森脇登美子（私部）私の戦争体験「ああ悲しき異国の思い出」	34
矢寺好子（私部）私の戦争体験（平和を願って）	45
渡邉芳治（倉治）満蒙義勇軍そしてシベリヤへ	46
▽聞き取り（同右）	
藤田茂夫（南星台）	52
松田珠次（倉治）	56
渡邉芳治（倉治）	58
交野の平和と戦争関連モニュメントから	60
交野市「平和と人権を守る都市宣言」（日本文および英文）	62
あとがき	64

題字　渋谷正　　挿し絵　進藤伊織

表紙　「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することば。花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。



交野市民の皆さんによる２万羽以上の折り鶴で作られた「飛翔する鶴」と「親子星」

（平成１７年度交野市平和祈念イベントから）

わたしの昭和前半時代

北田陸夫（私部）

戦前

わたしの誕生は、昭和七年三月十日、名は陸夫ということから語り始めよう。変な書き出しになって恐縮だが、わたしの命名の由来から話し始めなければならない。戦前、「陸軍記念日」というのが、三月十日にあり、たまたま、この日の誕生ということで、父は「陸夫」とつけたと話す。きっと、その頃からすでに日本は軍国主義の道を歩み始めていたのだろう。わたしも、物心つき始めた頃から「大きくなったら、お国のため、天皇陛下のため、強く立派な兵隊さんになろう」と思い続けていたことを鮮明に想起する。

今では、交野に充実した幼稚園・保育所があるが、当時は一園もなく、昭和十二年、わたしは、私部・無量光寺本堂で、春と秋、それぞれ一ヶ月農繁期に限って開かれる託児所へ行った。ここでも、日の丸の旗を書いたり「兵隊さんよありがとう」「父よあなたは強かった」などの軍歌を、たどたどしい歌い方ながら歌わせられたものである。

昭和十三年四月、交南高等尋常小学校尋常科一年生に入学、高等科のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちと共に通学する。今は、国語科といわれているが、その頃は、よみかた・かきかた・つづりかたと分けられていた。また、修身というのがあり、忠君愛国、親孝行など教育勅語の内容に従って、学年毎にその重要さを洗脳されたものだ。優等賞が、毎年三月に出されていたが、六年間その文面をみると小学校前半は「品行方正学業優等～」となっているが、後半は「皇国日本」を前面に、軍国主義一色に突き進んで行った背景がうかがえる。

この頃、日支事変は、すでに始まっていた。おじさん（母の弟）は、中支で戦死し、英霊で遺骨がかえってきた。とても悲しかった。

戦中

昭和十六年十二月八日　特攻隊真珠湾奇襲作戦に成功、大東亜戦争に突入、戦勝ムードの中、勝った勝ったと大本営発表で連日伝えられた。米・英・中国の大陸を相手に、小国日・独・伊三国は強いということをしみじみ思ったものだった。「神国日本」「鬼畜米英」など、連日、ラジオ、新聞が報じた。

小学校時代の遊びは、もっぱら野外で、兵隊ごっこ、戦争ごっこをあきもせずやっていた。陸軍ごっこでは、二等兵、伍長、中将などと階級をつけ、上下関係を明確に分け、遊んだもの、海軍ごっこでは、大きい戦艦に乗るときの敬礼は、大きく手を広げ、

また、小さい駆逐艦、潜水艦に乗るときの敬礼は手の広げ方をだんだん狭くしていった。田んぼでも、少しの空き地でも、ガキ大将が集まってよく遊び、木登り、ケンカなどもよくしたが、大きなケガ、いじめなどは皆無だった。近くの池、天の川でもよく泳ぎに行った。

四・五・六年生頃は、森方面山の学林での植林、下草刈が増え、今の私部住吉神社南の畑開墾、京阪交野線に沿っての田んぼの開墾などに精出したものである。畑には、イモ、大豆など、田んぼでは、米・麦などを作った。

勉強の中心は軍国主義の高揚を目的とした内容に終始した。音楽(当時は唱歌といった)の時間は、軍歌を元気にいつも歌っていた。「愛国行進曲」「暁に祈る」「日の丸行進曲」「君が代」「露営の歌」「紀元二千六百年」「海行かば」「麦と兵隊」などを毎日大きな声を出して歌ったというよりも叫んでいたものだ。

交野の兵隊さんが、戦（病）死されると近辺の片町線、交野線の各駅へ、英霊迎えに勉強を中断して行ったものだ。倉治は津田駅へ、私部は交野駅へというように。

このころから戦時体制となり「ほしがりません勝つまでは」を合言葉に、全ての面で質素倹約の徹底が唱えられた。物資不足から、米・麦・タバコ・醤油・味噌・肉・魚・砂糖に至るまで、トントントンカラリの「隣組組織」を通じて配給制度が続けられた。衣料品についても衣料切符で制限された。

昭和十八年秋、伊勢方面の修学旅行を一泊で行ったが、米持参、防空ずきんまでも携行した。一年後の学年からは、戦争がはげしくなり、伊勢一泊修学旅行は中断された。

小学校在学中、校名は、交野国民学校初等科・高等科に改名され、昭和十九年三月初等科を卒業した。

昭和十九年四月、中学校（旧制五年制）に入学、防空服（国民服）ゲートル着用で通学。といっても、一年生の二ヵ月程度勉強したのみで、六月からは、運動場あるいは淀川河川敷などへ毎日開墾に出かけ、イモ・麦・大豆などを耕作、増産に励む。

二年生以上の生徒は、みんな学徒動員で各地の軍需工場へ、わたしたち一年生は秋頃より学校防護と称して一週間一回程度、学校で泊り込む。翌日、帰宅するが、学校が不衛生のため、毎回シラミをつけて帰り、必ず、着衣を全て脱ぎ、熱湯消毒、その後、家の中に入るという生活。中学校一年生の教科書学習は殆どなく、特に英語は、敵性語ということで追放、英語の学習はなかった。

学校、各家には、必ず、手作りの竹やりや、水を満たした防火用水があり、ガラスの飛散予防に、各窓ガラスに十字の紙が張られた。

昭和二十年に入ると、東京はもちろん、大阪にも空襲が始まり、警報のサイレンがひっきりなしに昼夜鳴り渡った。今でも、サイ

レンを聞くと、あまりいい気がしない。

同年四月には二年生に進級。進級とは名目のみ、学校へ行くことはなく、毎日、京阪香里園駅に集合、隊列を組んで、軍歌を大きな声で歌いながら、今の香里団地まで歩く。

昭和十三年、枚方禁野の火薬庫で大きな爆発事故があり、それ以後、弾の外側は、枚方工廠で、火薬入れは、香里工廠でと分業化された。昭和十三年の火薬庫爆発時、わたしは小学校一年生、家のガラス戸は、爆風で全てわれ、血みどろになった被害者がトラックに乗せられ、交野方面へもたくさん来られたことを、今も忘れることができない。

この頃から、交野上空にも大きい爆撃機Ｂ２９の飛来、小さい艦載機Ｐ５１の屋根すれすれでの家・田畑・牛などへの機銃掃射がたびたび続いた。それは、恐怖・恐怖の連続で、生きた心地がしなかった。かやの中で、また、防空壕の奥深く、声をひそめて、敵機の飛び去るのを祈るのみだった。

学徒動員先の香里工廠では、連日、黄色い手をしての火薬つめ、その他、牛がいなくなった代わりとして、私たち十人組くらいで、牛車に積んだ石炭、弾運びなどを行なった。昼食は、木の弁当箱で、大豆、かぼちゃ、大根、いもが殆どと、米粒を探さないと見つからないもので、何とか腹をもたせる程度のもので、一生懸命頑張った。戦争に勝つことを、子供心ながらに信じて――。

片町線経由の引込み線が、枚方工廠と香里工廠の間に設けられこの貨車にも、弾薬運搬のためよく乗せられた。貨車内部は、真っ暗だった。この引込み線の一部が、津田から、星田から、今は道路になっている。

当時、小学校教師をしていた父にも、終戦の年昭和二十年四月十四日午前三時頃、召集令状が届く。早速、入隊後に毎日使うふんどしを十枚以上も母がせっせと縫っている姿が、今も目の前に浮かんでくる。（軍隊では、パンツは不可）入隊は、大阪八連隊へ翌日の十五日正午にとあわただしい二日間だったことをはっきりと思い出す。私部住吉神社で出征祈願を受け、交野駅まで多くの人たちの見送りがあった。大阪八連隊（馬場町）に入営、連隊入口まで、母たちといっしょに見送った。

今も、そのとき「父の姿を見るのもひょっとするとこれが最後か」と悲しみの心いっぱいしみじみと感じたことをはっきりと思い出す。四月十八日には、船で朝鮮へ渡ったとの連絡を受ける。

四月以後、必ず、月一回は、母と石清水八幡宮へ「父が無事生きて帰れること、父の武運長久」を祈願してお参りした。当時、石清水八幡宮のケーブルカーの線路は、戦争協力のため鉄くずとして供出され、徒歩での男山往復だった。でも、また元気な父と会いたいとの一心から、つらい、しんどいと思ったことは一度も

なかった。

大阪空襲も度重なり、沖なわ撤退なども伝えられた。大阪市内で焼け出された一家六人が、私の家の離れで疎開生活を始めた。

大本営発表などにより戦争は必ず勝つ「撃ちてし止まぬ」と、学校ではなく、香里工廠で毎日よく働いた。一ヶ月に数回、学校へ行くと、配属将校の軍事教練があり、徹底的にシゴかれた。

八月十五日夕、香里工廠で、天皇陛下が戦争終結を宣言されたニュースを耳にした。戦争が終わったことは聞いたが、戦争に負けたとか敗戦といったことについては、誰一人として言うものはいなかった。八月に、広島・長崎に原子爆弾が投下されたこともこの時耳にした。

連日、空襲が続く中、子ども心に戦争が終わったことは、何となく嬉しい気持ちがした。

戦後

八月終わり頃、中学校校舎へかえった。二年生だったので、詳しいことは覚えていないが先生が言ったことを覚えている。

「今までは、天皇のため、皇国日本のためによく働いてきてくれたが、これからは、日本復興のため、しっかり勉強しよう」との主旨の話を聞いた。中二心なりに「働け働けから、一転勉強勉強」と先生もいいかげんなことを言うなと感じたものである。

この年の十一月末には、出征していた父が朝鮮から復員兵としてかえってきた。父の元気な姿を見た時、それはそれは嬉しかった。

戦後の学制改革で、小学校高等科二年が新制中学校三年へと義務教育が一年延長された。その上に、三年間の新制高校が誕生した。

昭和二十年九月から徐々に学習が始まったが、教科書は新聞紙を切り綴ったような貧弱なもので、本としてはとても言えないものだった。また、戦争に関する部分、鬼畜米英といった部分は、全て墨でぬりつぶして使った。また、中学校一年生入学以来、学習していなかった英語は、基礎基本部分が全くできていないため、わからないまま高校三年生卒業の日を迎えた。今も英語には劣等感をもち続けている。

戦後学制改革のため、私には、中学校卒業高等学校入学がない。同じ旧制中学校で、中学校・高等学校六年間を送ったことになる。

昭和二十五年高等学校卒業、同年四月新制大学入学、二十九年三月新制大学二期生として卒業、高校・大学を通して、何よりも苦労した教科はもちろん基礎基本のできていない英語だった。戦争の傷あとが、どこにどう及ぶかわからない。

二度と戦争を繰り返してはならない。戦争をにくむとともに、平和のすばらしさ、ありがたさを実感すること頻りである。

原子爆弾被爆の日

古賀好松（倉治）

三日前に広島に凄い爆弾が落ちたそうだと巷の間で話題のトップになっていた。現在のように情報が発達していなくてピーピーと雑音の入るラジオを耳に傾け乍らそのニュースを知った思い出がある。当時は新型爆弾だ、風船爆弾だ、と勝手に名前を呼んでいたけれどこれが原子爆弾だと知るには少々時間がかかった。

その凄い殺傷力のある爆弾に直面しようなんて夢にでも考えていなかった。しかし長崎が軍需工場地帯で三菱系の造船所、製鋼所、私の職場だった兵器製作所と規模の大きい工場が並んでいたので、当然爆撃の標的になるであろう位は予想ができていた。

昭和二十年八月九日、連日暑い日が続いていてこの日も朝から暑い、工場出勤して間もなく敵機来襲の警戒警報が発令された。ここの所毎日頻繁になってきた、職場の鍛造（たん）工場長が何を考えてか急に「どうせ死ぬのだったら良い服に着換えて死にたいのう」と冗談まじりで発言された。事務所内の技師さん、技手など数名と学徒動員の女学生二名が通勤服に着換えた。矢張り空襲警報に入った。例の様に工場横にある防空壕へ入った数分後何ごとも起こらず解除になった。やれやれといった気分で職場に戻ってどれ位経っただろうか、再び空襲警報が発令されたのか、どうか、記憶が薄い。防空壕に入っていた人が皆無だったのをみても空襲警報は発令されていなかった状態だったと思う。瞬間の閃光が目にも鮮やかとでも表現したらいいのか、その色は言葉で表せないピカーと一面に走ったと同時に大音響が轟いた。周辺が一瞬にして夜を思わせる程まっ暗になった。もう何がどうなって何が起きたのか全く分からない。余りの凄さに違った世界にでも入り込んだのかと錯覚さえ感じた。呆然とし乍ら暫くしてから爆撃を受けたのだと悟ることが出来た。自分を見失っていても逃げるという本能は失っていなかったようだ。

工場横の防空壕へ逃げたのが今だによく想い出せない。微かな記憶の中で事務所から工場への通常の出入口でなくて中窓のある所をくぐり抜け工場へ出て防空壕へと、と考えていたけれどその時は既に中窓や出入口など当然ふっ飛んで潰されており幻想だったのかも知れない。瞬間そこで見たもの聞いたもの総てが現実かと目耳を覆いたくなる惨状だった。工場の屋根はなく柱も殆ど立っていない。天井を走っていたクレーンも地上に叩き潰され、それらの破壊により多くの人々が下敷きになったり押し潰されたりで負傷者が多数出てる様だった。或る人は絶叫し、或る人は呻き

将に地獄絵巻を見ている感だった。
それでも大勢の人々が防空壕へと逃げている。私も夢中で防空壕へ入った。余り大きくない壕なのでいっぱいの人だ。皆血だらけで顔など真黒だ。その中で一人の職工さんに凄く出血していたので注意したら「お宅も耳が切れて出血してますよ」といわれ手を当ててみて初めて耳が半分に切れて垂れ下がっているのに気づき頭も背中も傷だらけを知った。
事務所の机の配置で私の机だけが製図用で表面が斜めで、椅子の後ろには兵器部品を製図した青写真を詰めたガラス戸棚がずらり並んでいて、爆風で私の背中から叩きつけられた為、頭と背中に無数の切り傷を負い耳も切られたようだった。壕の中で警報の時ズボンに巻いていたゲートルで耳を横にくくった。
外を覗いたら絶叫と号泣を聞き続け乍ら荒涼と化した中を殆どの人が山の手の方向へ退避していた。幸い工場の横に側溝（巾約二米位、水も少し流れている）の中に入り皆の後ろへ続いた。その途中戦斗機が機銃掃射をしてきた。之は側溝の中の人々を狙わなくて威嚇の為に道路を撃っていると感じた。山の手の方へ行ってもどこも燃えてるし真夏の道路は熱くて長い距離は歩けない。下り坂にかかってやや大きめの川に出た。中を歩くことは不可能だったけれど岸辺を歩いて驚いた。男女を問わず肌が直接太陽に当たって露出している部分は凄いヤケドで真黒になり、しかも水ぶくれで爛れて腫れあがっている。何と高熱の閃光だったのかと改めて感心し乍ら、余りの光景に唯呆然として動くことさえ出来なかった事をよく覚えている。
そんな人々は皆、水を欲しがっていた。しかし川の水は飲めないし困った状態だった。誰かが「水を飲んだら死んでしまうよ」。と言った。多分末期の水を連想したのだろうか。
こんな状況がこの世にあろうとは神様にしても想像に難かったと思う。累々と並ぶ絶命？の方、重傷で殆ど死と感じられる様な方々、どうしたら援助出来るのか若輩だった私らにはその術が見出せなかった。何人かの集団があっての行動だったら、何らかの対策があったろうと、今に尚悔いが残る。自分自身が退避に窮々としている最中、為すことが出来なかった。後日談に依ればヤケドの方々はケロイドで随分苦しみ、又放射能を浴びておられ難渋されたと聞及びました。
行先不明の逃避行だけれど治療所か、病院らしき所を目標にしているけれど、それらしき所は見つからない。駅かその周辺に辿りつけばなんとかなると思い乍らひたすら歩く。住居だった所も見たいと小高い丘の上に立ってそれらしき方向を見渡すけれど何一つ残っていない。道路の形状を察して想像するだけで全くの廃墟だった。その筈、住居辺りが爆心地に最も近くだったと後日判明した。尚、之も後日談だけれど寮母さんが二人おられていたけ

れど、二人共上半身は丸焼け状態で寮の前に設置してあった防火用水の桶に頭を突込んだ儘で絶命しておられたと聞き哀悼の気持でいっぱいだった。ここらの周辺の方々は殆ど防火用水に頭を突込み乍ら絶命されていたとのことでした。屋根瓦が熱で全く変形しているのを見てもいかに高熱の閃光だったかが想像できる。住居の近所と思わしき所に寄って見たけど私物らしき道具は何一つなく、一面灰だらけだった。それでも歩くうち鉄道の線路近くへと足は向いていた。途中どちらを向いても負傷者ばかり。暫くして長崎本線の線路へ辿りついたけれど線路の両側は悲鳴をあげ乍ら重傷者がいっぱいだ。

その中に列車が駅でない所で停まり負傷者を乗せ始めた。ここでは私ら軽傷の者は手伝いをすることが出来たので少しは援助に貢献したなと、気休めになった。そんな状況が一・二回続き軽症者は後回しで運んで行っている。多分治療の出来る所へピストン運転をしているものと思っていた。私らが乗れる時は周囲は既に暗くなっていた。列車の中は血生ぐさくて気分が悪い。道の尾駅を過ぎてトンネルに入った。所が出口真近で停まった儘動かない。不思議に思っていたら空襲警報で敵機が上空におるらしい、と伝え聞き車中の悪臭と列車の煙が列車内に充満し最悪の状態だった。漸く解除になり走り出し終点らしき所で全員下車、少し歩いて治療を受けるべき所へ入った。夜中なので判断し難いけれど病院ではなく、どうも学校の講堂の様だ。堂内は空襲に備え薄暗く負傷者で満員だった。呻き、悲鳴、号泣など異様な中、医師の先生、看護婦さん辺りが懸命の治療が施されていた。今考えたらこれだけ大勢の負傷者だし、殆どの方が外傷かヤケドの方が多かった様だし、赤チンキを塗り麻酔もそこそこに縫合されている様に映った。

泣きじゃくり乍ら暴れて治療を受けている少女がすぐ横にいて、顔を縫合して貰っていたのでよく見たら同じ職場で事務の補助をしてくれていた学徒動員の女学生の子だった。がんばってとその子の名を呼んで励ましたら、ひどく泣きじゃくり始末が悪かった。顔が変形する位酷く切り裂いていて重傷だった。長い時間が治療にかかった。治療中も痛さに手足をばたばたさせるので隣の方と二人で手足を押え込んで手術を終わった。

十四・五歳位の女学生がこんな目に会ってと思うと可哀想で同情の涙を禁じ得なかった。

そんな負傷者が超満員の状態だった。地獄のようだと表現したいけれど（地獄を見たことがないので想像の域を脱することは出来ません）その夜は一睡も出来ずに朝を迎えた事をよく覚えている。自分も耳を表裏から縫合し背中に無数の切り傷があったので対策本部へ申し出て田舎で治療を続行するべく罹災証明を頂いて帰省した。それから五日後田舎での通院帰りに終戦を知り、之で

空襲がないと、ホッと、胸をなでおろした思い出がある。
それ位飛行機が怖かった。今でも暗い状態で眠っていて急に頭上の電気を点灯されるとビックリして飛び起きることがよくある。原爆のあの閃光が脳裏に焼付いているのかと思う。
八月九日午前十一時三分は生涯絶対忘れ得ぬ私の原点だとも思っています。半世紀以上経った今、命の尊さ、生きてこれたことへの感謝を感じ乍ら戦争ましてや核戦争など人類の滅亡への道を辿る様なことが起こらないことを祈るのみである。

合掌

私の終戦記録

渋谷　正（青山）

★ソ連軍との戦争の始まり

若干十九才で志願兵として北満部隊へ入隊し、僅か二ヶ月後の昭和二十年八月九日、ソ連軍の国境突破の知らせを受けたときは、既に、道路・鉄道は爆破され、直ちに南方へ移動の命令を受け、部隊長付けとして食糧・薬・備品等を馬の背に乗せて出発した。

果てしない北満の荒野を、馬に跨り部隊長の命令を伝えるため、前に後ろに三昼夜走り続けた夜、兵士は草原で銃を抱えて横になり仮眠しているが、部隊長は、胸を張って座ったまま、眼を閉じ微動だにしない。食糧カンパンを渡しても、三～四個口に入れるだけ・・・私は、この姿を横で見て、[これが大和魂というものだ]と自分に言い聞かせた。

★空からはじめて機銃掃討に会う

一週間くらい過ぎ、何処からともなく人が集まり、人・人・人。その午後、駅近くで、ソ連軍の爆撃機の音がし、一斉に両横の、ポーミー（とうもろこし）畑へ散って身を隠した。

三機が低空で機銃掃討を繰り返す・・・その瞬間、身体が硬く息が止まる。夕立の如く弾が葉を貫く。パッパッと体の横五センチの所で土煙が上がり、近くで『うー』と、人の唸り声があちら、こちらで聞こえ、この時？？もう何もない、次は自分か、次は、次は・・・・と放心状態のうちに音が遠くへ・・・・早く道路に出て山へ逃げよう。負傷者、死者を乗り越え、われ先にと走る。道路に出たのは半数に満たない。あ・何百人が一瞬にして消えた？・・この生き地獄は今も、なお、私の脳裏に焼きついたまま・・・・・。

一ヶ月を過ぎ周りは、みな敵で、数え切れない銃撃に応戦を繰り返し、部隊長とは、離れ離れになったが、馬は放さず行動範囲を広げた。

何時しか自分自身が、だんだんと野生動物化したと、自覚が強くなり、大砲の音、銃の音を聞くと、すぐ、銃口がどちらに向いているか、位置方向が察知でき、加えて野性的臭覚が強くなり、地形を見ても、敵がどちらに居るか、岐路に立って右か左か即座に決定が出来るようになった。このことが、後々わが身を助け、多くの人々の命を救ったと自負していいことの一つでもある。

★若さと野性味を持ち活躍

南へ南へと歩く日本人は、出会いあり、別れあり、その中で我々の後に、『兵隊さん　兵隊さん』、と、呼びながら、ついて来る、三十才前後の女性ばかり、二十人余りが、男装に身を固め、頭には、日の丸の鉢巻をし、腰には軍刀をつり、見るからに、りりしい姿・・・。

私は、すぐ近寄り『あなた達　子供は・・・』と、聞くと、ぱっと振り向き、大粒な涙を流したので、三人程横に寄せ聞きただすと、『子供は腹が減った、足が痛い、と言って歩かない。この先親子とも死ぬと主人に対して申し訳ないので、皆で相談して、最後の白米を飯盒で炊き、林の中へ連れて行き食べている所へ、手榴弾を投げ、後ろを見ず走ってみんなに追いついて歩いている。・・・』と。

私はぐっと込み上げるのを、じっと歯を食いしばって、『よっしー行こう』と、列の中へ引き込んで、果てもなく歩き始めた。

★北満の原野を生きる知恵

北満の荒野での野宿に一番大切なものは『マッチと岩塩』で、命と代え難き宝物であった。これを草の葉で巻き、それをタオルで幾重にも巻き、それをまた腹に巻きつけ雨の降る日は、腹を下にして、じっと我慢したものだ。

数ヶ月も、山また山を歩き回り、野生人に成りきっても、ふと出会う、オオカミ・熊・トラなど、危険動物には、気の休まる時はなく、野宿は勿論、一時休息でも、夏でも、枯れ木を焚き、炎を大きく立ち上げたものだ。

★十月になると寒さに耐えられない

北満の十月と言えば、零下十五度を下回り、焚き火で暖をとるには、前身と後ろ身を交互に替え、また、そのころは栄養失調が進み、体は黄色く骸骨が動いている格好で、指は腫れ上がり、居眠りをしては、お互いに肩を叩いて起こしたものだ。起こさなければ、そのまま死に至る心配があった。

十月半ばには食料が切れ、畑にも食べ物はなく、およそ一ヶ月、水に岩塩を溶かし大切に飲み命をつないだ。その時、残り、わずか、六人となった・・・。

★若さも命も限界、投降を決意

もうこれ以上、野宿で耐え抜くことは出来ず、六人の意思をまとめ、投降することにした。

その朝、小川の氷をわり、水を飯ごうの蓋に汲み、水杯をして、銃を六丁、小川に流し手を合わせた。無言のままお互いに涙ながらに抱き合った。もうこれで命は終わりだ・・・と。

決意したからには、白い布を両手に高く揚げ、枯れたポーミー（とうもろこし）畑を前へ前へと進んだ。とたんパンパンと銃の音、勘で威嚇射撃とわかり、それでも前へ前へと進んだ。

民兵が大きな声で何か言っているが、わからない。近くなって顔が見えるようになった。両手の白い布を思い切り高く上げ前へ前へと進んだ。

これを見て発砲を止め、接近してきた。六人とも大きく息を吸い込んだ、頭がジーンとし、ただ茫然と立ち竦んだ。

民兵らしきものに捕まった。その瞬間、何も分からない頭の中は真っ白・・・彼らに体を触られて、しばらくして、気がつくと、すぐ持ち物を全部取り上げられて、我々を連れて歩き出した。

それから、数時間歩いてソ連軍に引き渡された。そこでまた、服を脱がされ、検査され、何もないので、肩に掛けた銃口を我々に向け発砲の脅しをする。

上官が静止し、我々の前で横に向き腕を曲げ、蒸気機関車のまねをし『東京ダワイー東京ダワイー』と繰り返す。これを聞き、あー、すぐ死ではなさそうだと、お互い顔を見合す？・？・？

★一般の日本人収容所へ

それから二昼夜歩き、牡丹江市の南の小さな部落の収容所へ着いた。大勢の日本人を見てはじめて命は自分のものかと、と我が身を何回も抓る。そして六人の顔に笑いが浮かんだ。

よかった　よかった、と、安心したのか、そこに座ったまま動けなくなり、抱きかかえられ、麦わらを敷いた土間に寝かされた。その収容所は、一般人の収容所で男女の区別がつかない。頭は丸刈りで、ぼろぼろの男の格好、後で聞くとソ連軍の女性への脅迫を防ぐ為だそうだ。

この記録は、ほんの一部で、私の一生を通じて、これだけ若さ、気強さ、頑張りを持って、何百・何千人と、銃撃戦・決死の食糧調達・夜間敵陣へ進入・偵察・明日の進路の決定などが出来たものか・・・？？

また、途中、目の前で銃殺される人、親から離れ泣きわめく子供、収容所で一緒に寝て朝起きると、隣の人、向こうの人何十人もが死、この連続であった。

今、こうして世の移り変わりが見られる事は、私の人生にとってなんと幸せなことか・・・・・。

「私の終戦の記録」第一号

追記（読み返して一言）

戦争という生か死か、の中で当時を思い出してどうしても私を攻めるものが六十年過ぎた現在でもたくさんある。

それは当時の八月中旬ごろ。限りなく続く草原を南へ南へと歩く途中、岩の上に母親と子供二人が休んでいた。その横を人々は進む。そのときとっさにその母親が私の服を固く掴んで「私たちを兵隊さんの持っている銃で撃ち殺してくれ」と大声で叫ぶ。すぐ横では子供たち二人が「お母さん、死にたくない」と叫ぶ。どうすることもできず、服はちぎれたが振り切って進んだ。

また、分水嶺ともいわれる小山脈を越えないと南下できないので登り始めたときのこと。最初は雨だが中腹から雪になった。途中小石の上に腰をかけた富山県出身の伍長と出会う。後から行くと言うので前に進んだが、危険を伴うので引き返すと、その伍長は元の場所から三分程歩いた所で頭を下に向け倒れていた。声をかけたが応答はなく思わず手を合わせた。指の間から見える大きな白い目、大きく開いた口は無情さこの上ない姿であった。

このような情景は数え切れないが、すべて人間の生と死。なぜ死へ向かう人を助けられないのか、深い自責の念に今も攻められる・・・・。

熟年のひびき　『ふるさと山河』

内藤　弘（倉治）

『わが生まれし大いなる家今はなく過ぎし歳月遠き思いは馳せる』懐かしい思い出は走馬燈のごとく脳裏を駆け巡り、その一つ一つを呼び起こそうと顧みる記憶をたどりながら、幼かった無垢な少年時代からペンを走らせることにした。

昭和八年七月、多産家の男五人、女五人の四男として生まれた。

現天皇と同じ年に生まれたことと重なり、皇太子誕生を祝って国中が提灯行列で賑わう目出度い年に生まれたことを聞かされ、誇らしく思った。

父は軍医としても応召し、後にも医師として働き、白衣を着ても着ていなくてもクレゾールが匂い、昼夜を問わず四六時中電話が鳴れば往診にも駆けつける、至って真面目な医者でとおし、多産家のわが家の生計を賄った。今も昔も変わりなく、医師という職業柄か幼い記憶の中にも割合不自由なく、幼少期が送れたように思う。

昭和十五年四月、尋常小学校一年生として、真新しいランドセルにピカピカの革靴を履いて、兄や姉に手をとられての登校となった。当時は男尊女卑のさなかにあり、男子は男子として、女子は女子としての役割分担がきちんと課せられる教育が奨められていた。

男子は男だけの四十五人が一クラスで学ぶことになっており、男女共学等とても考えられなく凛々しいものであった。

将来の目標はと問われれば、みんなが軍人と答え、特に、かっこいい土浦の予科連航空隊の七つボタンの桜と錨には羨望の目が強く、全員が口を揃えて憧れた。

生めよ増やせよ、子供沢山は国の基いとなり国策の模範として表彰を受ける等、子供は国の宝として多産奨励布令が発せられたのもこの時期である。昭和十五年十一月には、出始めていた日中戦争に対する引き締めの意図もあり、『贅沢は敵だ』『パーマネントは止めよう』『日の丸弁当』などが叫ばれ出し、国民の言論、思想の取締まりは激化の一途をたどり始め、軍の支配機構が強く打ち出されるところとなり、軍国化傾向が一層強固となり、ますます明確さを強めるところとなった。

昭和十六年四月、松岡外相はモスクワでスターリンと会見し、五ヵ年期限の日ソ間における中立条約を締結した。

ドイツ軍は六月初旬、ソ連に侵攻、日本軍は南部仏印に進駐した。対するアメリカ、イギリス、中国、オランダは日本に対して態度を硬化させ、ＡＢＣＤ戦略包囲網を敷き、日本人資産の凍結と石油、鉄鋼などの重要軍需物資の対日輸

出禁止を決定し、石油をとめられた日本の事態は宣戦にも等しく、ついに十二月八日、第二次世界大戦（大東亜戦争）に突入、敵愾心に燃え、一億一心が叫ばれた。

真珠湾奇襲による緒戦の戦果は国民に戦勝ムードを与え、確乎不抜の勇猛心となった。毎月の八日は大詔奉載日と決められ、神社では戦勝祈願が行われ、日曜日には境内を清掃するなど戦事ムードが漂い始めた。

昭和十七年二月、日本軍はシンガポールを占領、戦勝記念としてゴム毬が配られるなど、夜は提灯行列で終日大賑わいとなった。

反面、これを機に衣料品が切符制になるなどの配給統制が敷かれ、お寺の釣り鐘が強制的に供出となり、家庭にあっては古剣、鉄瓶などの供出令が出され、資源のない日本を露呈するところとなり、自分たちは夏休み返上で軍服や学生服の原料となる桑の皮集めに駆り出され、授業では英語が御法度となった。

時が経つにつれ緒戦の戦果も薄れ出し、六月にはミッドウエー作戦で大敗北を喫し、これを境に日本軍は敗北の加速度を増した。

国民は『非常時』を合い言葉に『欲しがりません勝つまでは』…戦争協力の耐乏生活が強いられ、麦、粟、甘藷、南瓜などの代用食が奨励され、学校では先生が弁当を検査し、米粒の多い弁当は利敵行為と見られ、子供心にもこれを会得しており、銀めしなど以ての外、甘藷のまにまに米粒があるを良しとした。学校は国民学校と改称され、児童にも耐乏と勤労奉仕が強いられ、中学校以上の生徒は工場や農村に勤労動員として駆り出され、日の丸の鉢巻を締めて『撃ちてし止まむ』の必勝の念に燃えた。

戦場へと出征して行く幼な顔が残る青年男子を、道の両側に並び日の丸の小旗を振り、わが家でも長兄、次兄と続けて見送るところとなり、『決して涙を見せるな』と笑顔で送り、街角に立っては、行き交う人々から千人針で祈念し武運長久を祈った。あちこちの玄関には『出征兵士の家』の表札が掲げられ、それが誇りでもあった。

戦況はますます激化し、昭和十八年四月には、航空機や戦艦等の燃料にさえ事欠く事態となり、軍指令部は国民総動員体制を敷き、なたね、ひまわり、椿、茶の実、松などの油類採集を強制し、児童全員もこれに参画し、現地への行き帰りには『憎いニミッツマッカーサー出て来りや地獄へ逆落とし』と隊列を組んで歌い、大いに士気を鼓舞した。

物資不足の日本に対して、新兵器と有り余る食糧、弾薬等の物資を駆使する米軍の物量作戦は着実に戦果を挙げ、一方日本軍の戦闘は次第に崩壊していった。この時の四月、元帥山本五十六海軍大将がソロモン群島沖で敵襲により戦死し、軍部では大痛手となった。

昭和十九年一月には、沖縄からの学童集団疎開が開始され、いよいよ戦況は国内に及ぶところとなり、時を同じくして隣組みが組織され、連帯が一層強化されるところとなった。戦況は後退を余儀なくするところとなり、六月になるとサイパン島が玉砕した。

国内では危機感が走り、B二十九爆撃機の行動半径に日本国土が入り、灯火管制が敷かれ、電灯の笠は袋で覆って空襲に備える等、いよいよ本土決戦近しで国民総武装、婦人達も『竹やり』を手にして連日エイッ！ヤーッの掛け声も勇ましく戦闘訓練が繰り返されるなど状況はますます緊迫してきた。

十月には、神風特別攻撃隊が編成され、人間魚雷『回天』などと共に、人命が攻撃弾となって体当り肉弾攻撃による極限の戦闘態勢が採用される激戦となった。

しかし、物量を誇る米軍の戦力の前には如何ともし難しで、昭和二十年三月には硫黄島が玉砕、これを期した如く連日、日本本土には米軍機が飛来し、無差別絨緞爆撃が加えられ、多くの都市が次々に破壊され、見るも無残な焼け野原と化し戦禍を残した。艦載機による空爆は日増しに激化し、迎え撃つ日本の零戦が要撃、防空壕から上空での空中戦が目撃された。ダッダッダッ、機銃が発せられ追いつ追われつ、しかし残念なことに迎え撃つ日本は多勢に無勢、友軍機が次から次にと武運拙く撃墜される戦況を、防空壕から身体を乗り出し拳を突き上げては悔しい思いをしながら懸命に見ていたことが今でも鮮明に脳裏に残っていて悲しい。学校の登下校時には防空頭巾を携行し、敵機が飛来すると道端の防空壕に退避し、授業は滞るばかり、変って避難訓練や消火訓練が頻繁となり、男という男の人達は軍隊へと出征し、先生も例外なく軍人として召集され残された多くは年老いた先生方であった。年老いた先生ではあるが先生の言いつけは絶対であり、先生の大元帥閣下の言葉が発せられるや否や全員が直立不動の姿勢がとらされ、『鬼畜米英』の言葉を駆使しては『日本男児』を強調し、学童が四年生になるや

教育勅語を暗記させられ、登下校の校門では歩調とれッの掛け声がかかり、一段と軍国色一辺倒の教育となった。

昭和二十年五月、米軍は沖縄に上陸、激戦の末、多くの犠牲者を出す死闘となり六月には終結、この状況については国民の戦意喪失になるとして直ぐには知らされなかった。

いよいよ九州上陸近しと防衛隊が組織され軍隊と合同して各所に配置され、兵舎が足りない分隊は民家に分駐する対応がとられた。

敵機飛来は日増しに頻繁になり、学校についても警戒警報に空襲警報が発せられて勉強にならず、警報が解除されてからの午後からの授業になることもあった。

日、独、伊の三国同盟のイタリアは、昭和十八年九月八日に、ドイツは昭和二十年五月七日にそれぞれ無条件降伏となり終結した。

残った日本は昭和二十年八月六日に広島、八月九日には長崎にと原爆が投下され、ついに来たるべき時となり、八月十五日に敗戦し、悪夢の終結をするところとなり終戦。

それは十五年にも及ぶ大小戦争の幕引でもあり、そして、このことは取りも直さず長い長い不幸のトンネルからの脱出でもあった。

育ち盛りの少年期を食うや食わずで、勉学もそこそこに軍律厳しい戦火の中で過ごした我々であったが、しかし、生き延びられたことは有難く感謝の念で一杯である。

・・・不幸にして、尊い命をお国の為とはいえ捧げられた戦死者の方々のことを思うと、本当に心が痛み、衷心より御冥福を永劫お祈りするしだいである。

そして、『二度と戦争を起こしてはならぬ』痛い程焼きついてる戦禍の跡、世界中が共存共栄、互いに助け合い平和でありたい。

今、こうして少年期を懐かしみ、偲びながら『ふるさと山河』として回想を執筆できる、現在があることを心から感謝するところである。

私の幻の青春時代

中西英雄（私部西）

光陰矢の如しで、歳月は流れ流れて昭和の時代は六十有年で終焉を迎えた。こうした時代背景を克明にタイムスリップして見たところ、戦前・戦中・戦後と三項目に分類してみた。

まず第一番に戦前では満州事変、第二番では二・二六事件と複雑多岐な時代で、正に支那事変の前哨戦とも言うべきか。やがて昭和十二年七月には支那事変が勃発して、四年後の昭和十六年の十二月八日には大東亜戦争となり、戦中真っ直中。こうした八年間の戦争での攻防で、私を含めての昭和一桁生まれの若者達は、国家存亡の生け贄として、不運の生涯を遂げた者が多い。

併し乍ら日本人としてこの世に生を受けた以上、各人共にこうした大和魂の気概は、お互いに忠誠心で以て国難に当たり、いざとなればお国の為に死ぬことは日本男子の本懐であった。でも長期間の戦争で国民は悲惨だったが、軍部はそれでも本土決戦も辞さないと、その当時の大本営は、一億玉砕してでも所期の目的を達成すべく、国際連盟を脱退して米英他連合国に対し宣戦布告したのである。

日本側も日独伊の三国同盟で対抗して、最初の一年間はある程度はやや優勢で戦果を挙げたが、あに図らんや土壇場で、広島・長崎にピカドン二個の投下でアメリカに屈服、日本は無条件降伏したのである。

日本人は天皇陛下の決断によりピンチを免れ、日本国土の確保と日本人の身の安全と、そして平和を獲得した。

戦争中の私達国民学校の高学年の子供達は、国策に従って陸海軍に志願したり、海軍工廠・陸軍工廠とか、満蒙開拓義勇軍とか応募先は沢山あったが私はハルビン満鉄の江運技術員養成所に入ることを希望し、学校を卒業してから青雲の志を抱いて、十五才で渡満して入所することにした。当時は予科練に人気が集中して入隊する子弟が多かったように思う。

いったん入隊してから軍命令で優秀な兵隊を俗にいう特攻隊に志願させて、戦功に依って二十才前後の年齢の若さで戦死した場合、二階級特進を受け出世して、大尉に昇進した若者も数多い。が、死に花咲かせて戦死してもまるで犬死に等しく、可哀相である。

その当時の特攻隊員の辞世の句を引用して書き連ねると、「七生報国」や「断じて行えば鬼神も之を避く」この言葉を子供の頃大東亜戦争当時の新聞記事に出ていたのを記憶をたどって書いてみた。またその当時は新聞記事に「銃後の守りは大丈夫か」などいつもこうした文句はよく見聞きした。

戦争が長期化すると戦死者が増え、その補充に軍命令で若者を大量に募集したが、ご多分に洩れず昭和十七年十一月といえば、日米海軍が南太平洋に於いて雌雄を決した月。決戦場ミッドウエイ海戦はものの見事にボロ負けした。これは一年前の真珠湾攻撃の仇をとられたのだと、当時の年配の人達が言っていたのをよく聞いた。その頃から日本軍の旗色が悪くなっていったし、若者は軍国主義者に操られて尊い命を散らした。

『このような若者達の犠牲のお陰で、現在の日本の繁栄と平和が保たれているという現実を踏まえ、私達も良く考えて、今後の日本国民は全員挙って一丸となって、平和な時代を恒久的に構築していく努力をしようではないか。』

ミッドウエイ海戦後の昭和十七年十二月三日、学校の先生に言われるがままに、私は四国高松仏生山公会堂に於いて若年ながら十四才で海軍電信兵に目出度く合格して、採用待ちのまま昭和十八年五月一日に渡満、ハルビン満鉄江運技術員養成所に入所した。北満三江とは「ウスリー江・黒龍江・松花江」を言う。

養成所では、河川船舶の中堅要員として、機関科にピカピカの一年生に入学した。

昭和十八年五月一日に入所した当時は、その近辺には白系ロシア人が数多く住む町だったが、白系ロシア人は推定四万人位、そしてハルビンの人口は八十万、現在は三百万人位とか聞く。そのキタイスカイ街の一角に養成所があった。すぐ横には鉄筋十階建てのビル、その側壁には日本のメンソレータムの会社の宣伝文句を中国語で「面速達膏」の大きな字で鮮やかに書いてあったのをよく覚えている。

そこから松花江の堤防まで五百米位だが、毎日ボート漕ぎの訓練だった。養成所からハルビン神社まで五キロの道程を駈走訓練で往復して、尚かつどん尻になった人は、教官が「ヨシ」というまで見せしめに、へとへとになるまで走らされた記憶が有る。軍隊さながらの猛訓練だった。

二、三ヶ月後、松花江の中州にある大陽島で訓練中、松花江の貝の天ぷらを食べて、食あたりして、ハルビン駅前の満鉄病院に長期入院。その時の出来事だが、昭和十八年八月末、十五才で日本の海軍省より養成所経由で召集令状を貰ったものの余病が出て満鉄病院に引き続き長期入院となったので、入隊免除の処置となった。そして、昭和十九年二月上旬に退院。

昭和十九年四月一日から昭和二十年八月十五日の終戦まで、ハルビン鉄道局内北満江運局総務部文書科特信に勤務し、無線電信暗号解読業務に専念した。

近くのハルビン気象台へは、毎日のように所用で行った。そして終戦後は道裡の青年隊の自彊隊舎に住んでいたが、昭和二十年八月二十七日の深夜十一時頃、炊事のボーイの密告によりソ連兵

の臨検を受けて、あわや銃殺されるところだった。室内は三人部屋で三人共自動小銃を胸元に突き付けられた。

事の起こりは、八月十八日の松花江に駐屯していた関東軍の四五九部隊の将校より、陸軍の軍刀（刃渡り二尺六寸・革製サック入り）を貰って室内に隠していたのが見つかれば、即刻銃殺かハバロスクに連行され軍法会議に掛けられると。今から考えたらなんと馬鹿な事をしたんだろうと恥ずかしい限りである。

八月二十九日早朝五時には全員ソ連兵に連行され、捕虜になりハルビンからソ満国境まで各収容所（九ヶ所）を転々と移動した。そのあげくそこから牡丹江まで後退して、そこの収容所に二十一日間、鉄条網の中でソ連兵の監視の下、所内では絶対服従で共産党万歳の教育を毎日受けて生活していた。食事は高粱の玄で、個別の配給で貰って、また飲料水も行列して貰った。先ず大きな缶詰の缶に高粱の玄を入れ、二度炊きして赤い汁を出し、岩塩を入れて食べた。別の食糧は豆粕とか馬用の黒パンを配給で貰って食べた。空腹で食べても反吐が出るくらいまずかった。

幸か不幸か昭和二十年九月下旬に解放され、またハルビンまで帰り、一ヶ月後の十月末には南満の撫順の新屯に、北満江運局事業所の殆どの従業員・家族全員が撫順に移転した。

働ける男性は皆心機一転、昼夜三交代制の労働だったが、人車で三回乗り替えて地底の底まで行き、働きながら頑張って生活していた。しかしその後、一日千秋の思いで待ちに待った帰国許可が出て、いよいよ帰国する事になった。撫順に来てから八ヶ月後やっと念願かなって、昭和二十一年六月末コロ島経由で東舞鶴に帰国した。

これは回想録になるが、今でも印象に残っている事といえば、昭和二十年九月九日頃、雨の降りしきる中、日本人捕虜老若男女約三千人が、ハルビン・牡丹江線の中間の駅、横道河子の駅に下車。ソ連兵の誘導で駅前の山峡谷の山道を抜け、谷川の側面を通り関東軍の軍用道路に向かって三キロ程抜けた間道横の谷川の畔に、日本の兵隊さんが八人程谷川に向かって川の字形に皆横たわって死んでいて、大分腐食していた。多分、ソ連軍との戦闘で攻撃されて、戦死したものと推測した。

それから引き続き私達は、道幅の広い軍用道路を四列縦隊でありてもなく徒歩行進。前方と後方にはジープ五、六台、ソ連兵の絶えず監視下にあり、逃亡すれば即座に銃殺されることは間違い無い。従って私達仲間は運命共同体である。雨が降ってもカッパも無く、食糧も少量で、みなフラフラだった。所々で小休止しながらただもくもくと歩くだけ。その頃一緒に歩いた若い三十代四十代の小さい子連れの婦人達は、今頃どうして居るかなあ！

一路海林を目指していた混成男女捕虜群団は、夜を徹して三三五五と歩いていた。私達は空腹で歩けなくなり、深夜大きな玉蜀

黍畑の農場の前で小休止。そして収穫跡の歯抜けの玉蜀黍を、大勢の日本人が血眼になって探して、薪を拾って来て焼いて食べた。その美味しかった事は忘れられない。

いかに敗戦国民が外地で、どんな辛い思いをして生き長らえて内地に帰って来たかを知って貰いたいと切に思う。そして敗戦国民である哀れな日本人は、外地では一日たりとも命の保障もなくいつ殺されるか分からない。

撫順で疥癬・チフス・シラミに困り果て、食糧も無く、昭和二十一年酷寒の二月、零下三十度の中、私は砂の上に落ちた約二合程の米を四時間掛けて拾った。米を大きな缶詰の缶に入れて炊いて食べたが、空腹の為、美味しさは格別だった。

昭和二十一年三月末半ば、同僚が毎日死んだが、明日は我が身と生きた心地がしなかった。そして私はもう駄目だと覚悟した。

天国の母親に天に向かって「助けて下さい。」と哀願を何回したことか。また氷点下の天空を飛ぶ雁の群れを見て、自分も変身し鳥になってでも、故郷に帰りたい一心で神仏に祈る日々だった。今、私にとってこうした六十年前の出来事が、日々走馬燈の如くに想起している今日此の頃だが、実に感慨無量である。

また撫順では、日本人が死んでも火葬は禁止なので、全て方々に拵えてある防空壕に葬った。でも私達生き延びた日本人が今日あるのは、お互いに助け合い励まし合って、辛抱してきた賜物だと思う。

戦後、満州国内は中共軍と国府軍は内戦状態で、撫順ではその当時進駐軍として、ソ連軍、中共軍が入れ代わり立ち代わりで、最終的には国府軍の時代に自分等は住んでいた。

思い出せば同僚の中には杖をついて引き揚げ船に乗り、安心したのか船上で栄養失調で歩行困難になり、ばったり倒れて死んでいった。死ぬと間もなく死体を蓆に巻き、重りを付けて、船尾より黄海に投下。アメリカの輸送船八千トンの甲板上の汽笛がボーと一人の死体を海中に落とす度に、いわゆる水葬の礼として一回だけ鳴った。大変可哀相だった。

戦後の一年間は大陸に於いて、在留邦人は置いてきぼり。帰りたくても船便が無く帰れなかった。私も満州で一年間放浪の末、やっと帰国したものの、九才の時母親が死んでいないので邪魔者扱いされた。帰国後家庭の事情で一年半後に、今の家内と数え年十九才と十八才で、実家で結婚したが、月日の立つのは早いもので、もう五十八年になる。

田舎に十二年居て、大阪に出て四十六年になるが、現在では長男夫婦と孫達に囲まれ、お陰様で可もなく不可もなくで仲良く幸せに悠々自適な生活で頑張っている。二人共体は満身創痍で病気持ちなので、健康管理には今後も尚一層十分に気を付けて、余生を過ごしたいと思う。

心に残るのは今も尚、異国の凍土に眠る多くの朋友と比較して私も一つ間違えば死んでいたかも分からない境涯だったが、それでも本年末には無事七十七才の喜寿に到達するので、ささやかながら家族共々みんなで祝宴を挙げてくれる事になっている。

私達夫婦もそれに応えて、少しでも長生きして頑張って、有終の美を飾り、天寿を全うしたい所存である。

平成十七年十二月吉日

苦難の道　私の半生記

西田悦子（私部）

一九四三年春。憧れの高等女学校へ入学。四才上の姉（同五年生）が頭を梳き赤色ゴムで仕上げてくれ、セーラー服に手提げカバンで姉に従いて登校の幸せ者でしたが、夏服からは国民服に一斉統制された悲しい想い出があります。一方小学校とは違う学科に喜びと意欲が湧き他校からの友人も出来て私を育ててくれました。一方私達子供は勿論、大人にも解り難い世の中へと戦争の影響が忍び込み、街は道の片側の建物は強制的に倒壊させられ、住民は自分で移転したのです。ミツカン酢の社宅は幸い点在していたので全員無傷で最後迄焼ける事はありませんでした。

欲しがりません勝つまでは

一九四四年秋、高女二年生の私達にも学徒動員令で日本内燃機工場（ＪＲ尼崎事故後に協力された日本スピンドル株）で働く事になりました。

良妻賢母たるべき道を望み入学した私達は、主食、副食、衣料等を始め、お八つ券が月一度子供達に配給される辛い日となっていったが、それには我慢もしたが大好きな学校には行けず勿論勉強はなく、軍需工場で兵器づくりが毎日続き、その間敵の空襲がある度に会社内防空壕へ避難し、終われば又仕事を繰り返して一日を終え家路へ。

日を追って空襲が烈しく危険も増す事から、その後は一回目の空襲が終わると親元へ帰宅する様に変わりました。一目散で汽車の線路が最短と考えて縦一列で線路を走っていた時に、突然機銃掃射をうけ、線路に伏せる私の頭の先にピュンピュンと弾が石をはじく音で失神同然、ふと頭を上に向けると飛行士のメガネ顔がはっきりと見えました。当時はゴム靴等不足して居り、配給の下駄を履いていました。夕食後、恐ろしかった話をすると両親は心配し田舎へ転校する事を考えた。でも一人じゃないし皆辛い目に逢っているんだからとも言っていました。

中の姉は高等女学校五年卒業即、女子学徒挺身隊とされ住友金属工業に勤めておるました。帰宅は私より遅く、隣家のご主人が課長なのでよく送り届けて下さいました。

長姉（本年一月亡）は、夫（三菱重工勤務）の出征の後、父が連れ帰り我が家で長男を出産したのですが、配給だけでは乳が足りず、田舎からの贈り物等何でも一番先に与えられ、孫を立派な兵士に育て様と家族は協力し、姉自身も弱音をはく事なく健気に銃後の妻を続けました。

私は結婚後姉の気持ちが痛い程理解出来る様になり実家に姉妹

が集まる時には必ず各々の苦労話に時が過ぎた日を懐かしく思い改めて戦争をしては駄目であると考えます。

大阪空襲は一九四五年三月十三日夜でした。社宅の人達が誰言うとなく「今夜は近いな、よく燃えるじゃないか。」なんて言っていました。翌日十四日は父の誕生日でしたが、大阪支店勤務なのに朝出たまま何時になっても帰宅せず心配していたら、夜半近く傷心で帰宅するなり「店は全焼金庫一つだけ残った。名古屋の本社への報告に手間取り心配な事や。」

父は偉大な人と尊敬していただけに疲れ切った姿は気の毒に思えました。これを機に只一人の男子（満一才の甥）とその母親である長姉の二人が三重県の母の実家へ疎開する事になりました。

日頃から教えられていた事の一つは「防空壕の中で焼夷弾等落下の際、光と音から身を護る術として目と耳を両手で押さえ、口を開けなさい。」でしたが、私は何時も甥の目と耳を押さえ泣く児は口を開けてあばれました。自分はどうなっても仕方がない、男児は兵士になる人。母親は授乳して立派に育てる役があったのですが、しかし姉の疎開で私の役目は無くなって、子供好きな私には辛い事でした。

一九四五年も日を追う毎に戦況もきびしく、サイパンそして沖縄と、子供心にも不安がつのる日々。七月には工場の疎開で八鹿工場が新設となり、私達女学生も同時に学徒疎開が決まり先発隊となった。荷物を学校で纏め現地へ送られました。出発前夜に父から親姉達と離れて暮らした事のない私に「水が変わるが健康に注意し皆と仲良く、先生に心配かけない様に、そして家や家族が無くなった時は三重県へ行く様に。」と言われ、すごい事だなあと身の縮む思いでした。

集団学徒疎開出発は一九四五年七月末（晴れ）時間がどんどん過ぎ親を始め家族の見送りがプラットホーム一杯に溢れ、各々別れの時を迎えているのに父の姿が見つからぬ為、あせりと悲しさで涙沸々の有様に。やがて列車は動き出し人が見えなくなる迄身を乗り出しての涙の別れも一段落し、窓側だった自分の席に腰を下ろし改めて友より多く出てくる涙を拭きながら窓の外に目をやると、そこは踏切で遮断機が下りていて、何と問題の父が自転車から降り、戦闘帽を脱ぎ白いタオルと両方を振りかざして列車を見送っているのに気付き「お父さん」と号泣しました。

後は色んな思いにかられながら目的地に着きました。正に神仏に感謝の念は今も変わりません。もし私の席が窓と反対側ならばすべてなかった話。それにしても父の勘はどこから来たものかしら。

支店焼失以来責任者の父の仕事は大変、先ず尼崎工場内に大阪支店を移し、男子の少なくなる職場と社員を守り続けました。当日も見送る約束は忘れていないが時間が取れずプラットホーム

迄行く時間がないと考え駅から離れた踏切で列車を迎えて一行を見送る事にしたそうです。結果、幸いに我が子の泣き顔も見られた次第です。

父は阪神大震災の一九九五年八月に百二才で他界しました。

集団学徒疎開

一九四五年七月私達女生徒八十余人の住居は村の小学校講堂の二階で、端に職員室（教員二名）が当てられました。到着翌日から荷物を解き、自分のスペースに布団を置いて、持参の煎り米や飴玉を食べ、そして昨日別れたばかりの家族の事を想い、突然泣き出す友に誘われ、果ては泣きの集団となり、文字通り泣き寝入りしました。

ここでの仕事は工場建設の土地にある柿の木の伐採が始まり、その整理運搬するのですがこれが楽しい。甘柿なので青くても、ちぎり取り帽子、タオルだけでは足らず、果てはモンペにまで青柿を入れ足の周りはごつごつとし、ゴムは下がってくるわ終業の点呼姿には自分も笑えました。両足を揃えるのに柿がじゃまして皆仁王立ちだったのです。夕食後皮をむき糸に通してつるし柿の出来上がりです。持参のいり米も底をつく頃には十分美味しく大助かりでした。

日々の食事は思い出したくないが、副食は一品のみ、多かったのが茄子の二つ切り煮でした。麦飯はたまで、大豆じゃが芋、豆かす等で、ひどかったのは木箱に仕切り一枚丈、副食は塩味大豆主食はゆで大豆で殆ど同じ品です。仕切り板を取り全体をかきまぜ、食べようと思った量だけ食べ、後は残しました。

食事当番が順番にやってくるのが嬉しい。それは今は話せるが当時は自分の心の疾しさにうんざりした悲しい思い出。それは当番制の役得みたいなもので、着席順が決まっているから、何と自分の席には一番の良品を平気で置き知らぬ顔。親友に頼まれると同じ様にし、お互い様としました。両隣との差には目をつぶり、良妻賢母への道、程遠しです。平時では考えのつかぬ事態ですがこんなにも人間が簡単に荒ぶ様になってしまいました。

一九四五年八月十五日（水）敗戦

この日は会社の祝日（本来学生は夏休み期間なのですが）三三五五近くの川へ泳ぎに行っていました。男子が網で鮎を取ったり鯉を突いている人達を感心して見ていました。親友二人は皆帰るのに最後迄しつこく泳ぎとうとう空腹で手先が震えてきたので帰える事にしたが、途中農夫達の『負けたぞ。負けたぞ。』の声が聞こえるのでドキドキしながら、「何故神風が吹かなかったの」と声を出し、自問自答する有様宿舎に帰ると恐ろしや、広い部屋に人っ子一人居らず、二人分のお膳が残っておりました。よく見

ると、珍しく白米のご飯に茄子の煮付けが光っていたのです。でも、気味悪く食べる気にもなれず、友達を探しに正門の方へ行き更に驚いた光景とは、K先生を始め私達二人を除く全員が赤いポストの周りで、泣きじゃくり、何か話合ったり、異様な迄におびえおののいて居たのです。電話連絡も出来ず、本校からも会社からも、為す術がないまま時が過ぎ、強烈な夕日をボーとながめ、見送ったのでした。気が付けば白米の昼食は口にする事なく、夕食を皆で食べた後は家族の様子が気になり誰とはなく南を向いて泣き始め、自分達はどうなるのか、先生に聞いても判らず、先生もご家族の安否を心配され、そして共に泣き集団に加わりました。翌日からは積極的な仕事はなく、学校前の店屋の五球スーパーラジオを聞いた。『講堂から余り外へ出ない様に。』との連絡。また流言飛語が出てきだし、紀伊半島から豪州兵が上陸し、大阪へ来るから女性は丸刈り頭にし、男性は昼間は隠れること。もう居ても立ってもいられなく、少しでも早く家族の居る家に帰りたく祈る思いの日を重ねていたが、誰言うとなく自分達で家にうと決心がつきました。

帰心矢のごとし

八月末も近づき、九月からの二学期の事が気になり、月の明るい午前二時に出発。K先生と共に一同、月の砂漠を合唱しながら駅へと向かう事になりました。駅では長距離切符は買えず福知山駅で一回目の下車となるが空腹を耐えていたら百姓の小父さんが売りに行かれる二十世紀梨を私達に少額で一人二貫目も譲って下さり生き返った思いでした。二度目の下車三田駅に着くまで梨を食べ続け生き延びたものでした。心から感謝の念を今でも忘れる事は出来ません。

三田駅からは帰路も分かれる友ができ私は、神有電車で神戸へそして阪神電車で最寄り駅下車し、焼け跡地を一人不安にふるえ乍ら歩いて行く事暫し。最後の橋を渡る時、目を全開して自宅の方を見ると二階建てが見えるではないか？もうリュックの梨の重みも忘れ、駆け出しました。そして社宅の門をくぐると、全部が無事焼けずに社宅が有り懐かしい方達の姿に接し遂に「只今」とかすれた声で戸を開けると、台所から母が迎えに出てくれました後光が射していたと今でも思っています。

その夜帰宅した父と、中の姉の四人の生活が始まり、戦場へ征った兄を待つこと一年半。兄は虱のお土産でこれ又無事帰宅となり喜び合いました。

戦後の教育

戦後教育の方針制度の変更で教科書は、今までのではなくG・H・Qなる機関の検定済みのが使われました。それは図書と言え

ず新聞紙級に刷られたもので、自分達で切り離し製本しました。刷り上がって急ぎ配られたのがインクは滲み字は小さく脱字誤字の粗末なものでした。又日々の生活は物不足が続き、父の給料も自社製品の現物支給であり、それ等を物々交換して必需品に換えました。又母が実家の田植えと秋の穫り入れ時に、家事手伝いをした礼に米、麦、豆等々の食料をいただきました。

田舎の親類からも漬け物、味噌、餅と言った具合に大変お世話になりました。然しそれ等を我が家まで運ぶのが大仕事。義兄が復員するまでは殆ど私の役目でした。三重県の拓殖駅（関西線と草津線の合流点）で、日曜日は日帰りで運び屋をしました。

忘れも出来ないことは、いつもの通り大きなリュックに米、豆、餅米、小豆等を入れ、両手の風呂敷包みには白米のおにぎりに梅干し、果ては生みたての卵まであって、意気揚々で京都駅で乗り換え中に私服警官に引っ張られ、同じような人達がずらずらと七条署へ連れて行かれ、裏門から入ると広い所に間を開けて立て札があり【米】・【麦】・【豆】・【芋】と書かれている各々自分の持ち物の立て札の前に並ぶのです。初体験で要領も解らず途方にくれていたら一人の警官が手招きするので、そちらに行くとリュックの中を調べ『商売の運び屋ではないが統制品ばかりやな。いったい何処まで帰るの』と聞かれたので〇〇駅と答えると、「僕は一つ手前や、気をつけてね。」と重ねて言われ耳を疑いました。やっとの思いで外に出て大きな息をし、不思議に出てくる涙を拭きました。再び重い荷を背に家路を急ぎ物身共に無事到着。

後で気がついたのですが京都駅近くになると、汽車の窓から大きな包みを放り落としている人達を随分見ました。それはプロの担ぎ屋で、捕まる前に迎えの者と連絡をとり、窓から渡していたのですね。でもどうして張り込みの有無が連絡出来たのかしら？

そのうち学業の方も落ち着いて来たのですが戦前とは変わり学校内に米軍のジープで関係者が来校し、文化人として初来校は声楽家の砂原美智子様とバイオリン演奏家の辻久子様で強烈な印象を受け、背筋がゾクゾクしたものでした。

校外活動として文楽座で先代萩の上演を目のあたりにし、シテ、ツレ、ワキ黒子等の言葉を学びました。又裁判所の見学、阪大医学部での人体解剖を二階の席から終始見学し、へたり込んだ事でした。これも良妻賢母への一助と割り切り頑張りました。

一九四八年春五年制高等女学校生の最終学年として卒業し、四月からは新制高校三年生になりました。

男女七才にして席を同じゅうせずの私は、とても男女共学はなじめず中退し、当時のデモシカ先生（先生でも、先生しか）の時代は逆に就職難で多くの友は小学校の先生となりました。子供達に教える道は好まず、縁あってＯＬとなり職場は電車で梅田へ。そして御堂筋を南へ市庁、日本銀行を越えて住友ビル（現三井住友

ＢＫ本店）の四階でした。

五階六階は進駐軍の将校達の住居でした。昼休みにベランダで卓球や日光浴をしている私達を、窓から長い足を出して見ていたようです。会社は絶対に上を見ないようにと言うのですが無理。時には顔も見ました。

三日程勤めたが自信なく両親に相談しました。幸い一年上の従姉が近くの日本銀行に勤めていたので、何事も心配せず話を聞いてもらい、仲良くしてほしいとお願いしました。石の上にも三年とも説得された私は、その後二十七年間勤め上げ、一九七〇年の日本万博に出向し無事閉会式も終えました。

その後、ふと何時迄も両方の親に協力を強いるのではなく、親孝行の真似事もしよう。そして高校生になった息子に母らしいお弁当を作る決心を固め一九七六年退社しました。

記念に戴いた腕時計は身に付けず、時間を気にしない生活に入りました。

その後は現在も会社からは、毎年食事会の招待がありますが「箱入り婆さん」故夜の部は辞退している次第でございます。

暑けれど佳き世ならねど生きようぞ

柿若葉多忙を理由となすな

藤田湘子

平成十七年亡

氷菓なめ熱き血潮の日記帳

一株の鶏頭凛と墓の守

八重木槿切る一枝の惜しまれて

山牛蒡誰がために房赤く垂れ

悦子

大阪大空襲と私

丸田道子（私部西）

私は、一九四十年八月、大阪市西淀川区佃一丁目生れです。

一九四五年六月二十六日、佃町内会防空壕にＢ２９焼夷弾が直撃しました。

私の両親、兄弟あわせて家族五人が、町内会五十二名の方々と共に犠牲となりました。

当時私は四才で、なぜ、どのようにして生き延びたのか・・・幼なくして、あまりにも大きな戦争の打撃で、多くは語りつくせません。

四才の私は、めったに父母から離れることはなかったのに、数日前より、父方の祖父母と叔母に連れられて枚方に疎開に来ていたのです。「大阪の父母のもとに帰りたい・・・佃に帰りたい・・・」と、連日のようにダダをこねている内に、私は「はしか」にかかってしまいました。大阪に帰れなくなってしまった私のために、叔母は「道子が淋しがっているので、遊び相手をしてやってほしい」と、すぐ上の姉、貞子を枚方へ呼び寄せてくれました。

これが私達家族の運命の別れ目となり、佃に六月二十六日、Ｂ２９が直撃し、肉親と町内会五十二名が爆死しました。

戦争で生き残った人達の人生も激変して、叔母は、両親と、私達姉妹をかかえて、大変な生涯となりました。私も、人生の原点となってしまった戦争を背負いながらの、重くつらい思いで今日まで生き抜いてきました。

終戦前日の、一九四五年八月十四日まで大阪への米軍空襲は続きました。

終戦後、私は、犠牲となった肉親の分までこの世を生き抜こうとの思いと、五十二名もの尊い命と人生を、犬死に終わらせたくない思いがつのりました。せめても「慰霊碑」を建てたいとの願望から、昭和五十年頃、新聞社各社に「昭和二十年六月二十六日、佃一丁目の防空壕で犠牲者となられた方のご遺族は、名のり出て下さい」との『お尋ね人』記事をお願いしました。しかし、ほとんどの家族が一家全滅だったのか、名のり出て下さった遺族は、三名だけでした。佃町内会の人達の御尽力を得て、昭和五十三年、防空壕跡に「慰霊碑」を建て、毎年慰霊祭を行ってきました。お世話をして下さった町内会の皆様も高齢化し、五十回忌を区切りに解散となりました。五十回忌法要の後、佃の「正行寺」様に、永代供養をお願いいたしました。

ピースおおさか「大阪大空襲戦災遺族の会」で、炎に消えた命を「名簿」に残しています。

今年は、被爆、終戦六十年です。五月三日、憲法記念日に私は、

大阪城野外音楽堂にて「日本国憲法第九条を守る集い」に参加しました。今、政府は「新憲法草案」を発表していますが、「憲法改悪反対、第九条を守る」ことは、戦争のない、世界平和のために絶対に「平和憲法」は大切なことです。

この六月二十六日に、守口市在住の姉、望月貞子（七十二才）と共に「佃慰霊碑」で、肉親達の六十回忌法要を営みました。肉親や、戦争で犠牲になった多くの人々の六十回忌をおつとめさせて頂けたのは残された者のつとめでもあり、今日まで生かされたおかげです。

あの世で見守って下さっている多くの戦争犠牲者に心からの感謝と合掌を奉げます。

私の戦争体験『ああ悲しき異国の思い出』

森脇登美子（私部）

平和の継承体験談募集の記事を見て、私の体験を人生のまとめとして、ペンを執りました。

「古里」。私は、奈良県吉野郡賀生（あのう）村で、農家の六人兄弟の五番目に生まれました。上に姉と兄が三人、下に妹がいました。山青く水清い山間部で、冬柿の収穫と、父の大工の棟梁としての稼ぎが、我家の現金収入でした。貧しいながら温かい家族との幸せな日々。楽しい思い出が一杯で、そこで十歳まで過ごしました。そのような折、突然、長兄（二十歳）に、召集令状が来て出征。間もなく、満州の遼陽（りょうよう）部隊に入隊しました。

『満州開拓史』より、「当時日本は、満州大陸に五族協和の新農村を建設して、北辺鎮護と食糧増産の大国策を樹立して、開拓員の大量送出を実施して、海外移住を必要とした。民族協和等に最も効果的であり、いわゆる『一石二鳥』の政策であると考えられた。」

父は、講演などを聴くうち、親として将来の事を考え、狭い日本で努力するより、広い大陸に男のロマンを求め、母の反対を押し切って、家族で、昭和十四年四月、敦賀港から、大陸へと日本海の荒海を渡ったのです。

後になって解る父の気持。「長男も軍隊で満州。次兄も十六歳で義勇隊として満州ハルピンでお国の為に頑張っている。」父としての考えがあったのでしょう。私たちは子どもでしたので船に乗れるというだけで夢を膨らませていましたが、四月の日本海は厳しく辛い船旅でした。着いた港は清津で、先ずハルピンに義勇隊として入隊している次兄に面会に行く事から始まりました。国境を越え汽車の旅。車窓から見る風景は、広々とした畑、地平線に沈む赤い夕日の美しさ。子供心に驚く事ばかり。生まれて初めて見るシネラマ、今も脳裏から離れない。ハルピンの駅に着き、更に驚くことばかり。煉瓦造りの美しい街並、ウインドウの中のケーキやチョコレート。生まれてから見た事も食べた事もない。御伽噺（おとぎ）の国に居るよう。父は、私と妹に皮のブーツを買ってくれました。生まれて初めて履く革靴に二人は大喜び。四月とは言え、雪は深く足元の寒さが違います。

次の日、兄との面会です。馬車（マーチョー）に乗っていきました。兄はまだ

「十六歳」です。母は泣くばかりでした。内地から持ってきた沢山のお土産を渡して、私達は、「青溝子開拓団」に向いました。まだ知らぬ土地に出発。奥地はとても治安が悪く、「土匪」、「匪賊」が出没し、あちこちの開拓村で襲撃を受け、恐ろしい殺され方をした話を聞き、それが、頭から離れず、夜は怖くて眠れません。子ども心に、すぐ逃げられるように服を着たまま寝たり、靴を布団の下に入れて眠ったり、こんな夜が一年程続いたと思います。

入植当時の学校は、生徒が十名程で、あの頃は、尋常高等小学校でした。一年生から六年生まで校長先生が一人で教え、寺子屋風で、寄宿舎生活でした。食事等は、校長先生の奥様が作って下さいました。不安な情勢の上、親と離れての生活。今思えば、私より下級生の子どもは、どんなに怖かった事でしょう。一番の楽しみは、土曜日の午後から家に帰れること、日曜日の夕方、寄宿舎へ帰る時の寂しかったこと。

満州に来て半年ほど経った時、「八歳」の妹が病気で、一週間で亡くなりました。病院も十分でなく、悲しい出来事でした。「日本に居れば死ぬ事はなかった」と、母は悲しみ、苦しみました。そのうち、団員も増え、生徒も多くなり待望の煉瓦造りの美しい校舎と寮が、昭和一六年に完成しました。先生三名。生徒三十五名、教室三室、五・六年生は、殆ど自習か畑仕事、下級生の世話、散髪から洗濯と、親代りです。校長先生や先生の頭をバリカンで刈らせて頂きました。(切れないバリカンで) 今思えば、その頃から頭を扱う仕事に向いていたのかも・・・。

一コマ々々が懐かしく思い出されます。満州での生活も二・三年経つうちに、情勢も次第に良くなりかけた。昭和十六年十二月、「太平洋戦争」の勃発。大変な泥沼化となるが、私は、恐怖が去り、素晴らしい面が、見えてきました。冬は吹雪で見渡す限り白一色。零下二十度三十度の世界ですが、雪解け五月頃になると川の縁のネコ柳の芽が出て、雪の割れ目から福寿草が顔を出し、あっという間に広野一面花が咲き乱れ、短い期間に色々な花が、先を争うように白・黄・紫と絵具を流したような景色になります。すずらんの咲く頃は、一面すずらんの花。白・黄・オレンジの百合と、この素晴らしい花の群生は、今もそのままの姿を残しているでしょうか。忘れられないわらび採り、キノコ採り、魚釣り、簡単に大きななまず、鯉が掛り、子供の一番楽しい生活の真最中、そんな中、突然、あの知らせが入りました。

「無条件降伏、終戦」。八月十八日、二時頃、父が電話を受け、終戦を三日遅れで知る。父は、郷長をしていました。「全員を集め即引き揚げないと危ない。原住民が日本人に対する態度を悪化させる。」と、パニックにならないよう、団結を図り、身の回りの荷物と食糧を牛車・馬車に積み、家をその日の午後四時に出発。こ

の時三人の兄達は軍隊で、父は九部落全員のまとめの為、本部に先に行き、残った三人がどんな思いで準備したことか。当時私は十六歳、義姉(次兄の嫁)は六ヵ月の妊婦でした。牛に「くら」を付け、第一車に荷物を積み、残していく家畜に餌を一杯与え別れ、牛の手綱を持ち、早くこの場を離れたい思いでした。約四十名が本部に、九部落全員四三〇名が集まったのが、五時か六時頃。病人・老人・幼児・妊婦が大半で、ソ連侵攻と同時に、日本人の、祖国に向って大避難が始まったのです。再度、荷物を少なくし、病人老人、歩けない人を車に乗せ、担架で担ぎ、若い五十歳までの男性はみんな軍隊に行き、残っている男性で銃を持ち、避難民の護衛をしながら、夜道の行進です。以前に大人から聞いていた話が頭をよぎる。支那事変・南京陥落の時、満州事変・ノモンハン事変の際日本軍が、一般市民にどんな事をしたか。私の脳裏に刻まれている。どんな仕返しを受けるか知れない。怖くて怖くて山道を黙々と歩く。途中「額穆索(ガクボクサク)」満人と朝鮮人の町を通らないと「秋梨溝駅」に行くことが出来ない。又この町を通るには大きい長い橋を渡らないと前に進むことが出来ない、広い川に囲まれた中島の様な町です。ここまでやっとの思いで来ましたが、橋は壊され馬車等が渡れない様になって、やっと人が二人並んで通れる板があるだけ、又車から荷物を下ろし持てるだけの食糧と衣類をまとめ、後はすべて捨てる、早くしないと八月といえ暗くなる。母は私に「柳ごうり」にいっぱい衣類を入れ「男物のへこ帯」でこれを担ぐよう言われる「私はこんな荷物を持っては逃げることは出来ないすぐ日本に帰れるのだから、やめようと言う」「母は何時三人の兄達が復員してくるか解らない困らないよう」又すぐ日本に帰れるかどうかも解らない寒い冬も来る。皆で持てるだけ持とうねと言う。

こうしている時でも原住民が黒山となって私達を取り巻いて居る、怖くて怖くて必死です。担いで見ると重くて立てない自分の体重より重い荷物、後ろにひっくり返る、泣きながら手を引っぱってもらい、やっとの思いでふらふらと歩く、こうしてすべて略奪される。原住民も貧しい生活だから・・・　やっとの思いで五百人近い難民我々が渡り終わる、うす暗くなった町の中に入っても、私達を取り巻いていて隙あらばの感じ、この時は男性全員は銃や武器を持って居るのでこれ以上近づいてこない。この時、朝鮮人学校長が来られて今夜はこの学校で泊まりなさいと好意的に言って下さる。運動場で夕食を炊き食べる。男性は一夜警備にあたる。何時原住民の襲撃に遭うか「ロシア兵」が攻めて来るかと色々悪い情報が流れる。私は父にどんな事になっても、最後の「弾(タマ)三発」は残してね。母、義理義姉、私、の分だけでもと頼む、な

ぶり殺しにされたくない。怖い怖い夜、うとうと寝る目がさめて助かった。嬉しい、生きている。

「校長先生がしんせつに病人老人歩けない人達の為に『秋梨溝駅』まで斡旋を約束して下さる。」この事は大人から後から聞いた事です。感謝感謝

黒石(こくせき)毛(とん)開拓団は、早や無人。ここで又一泊する筈だったが、匪賊が出没するという情報が入り、みんな疲れて寝ていたのを起こして出発。急カーブの真暗な夜道を、小さな二・三歳位の幼児が誰一人泣くことなく、黙々と歩く。何かを感じているのか、真剣です。誰も助けてやれません。折しも突然の豪雨が襲い、泥と化し滑りながら歩く老人、子供は見るも無惨な姿です。雨が幸いして匪賊に襲われる事なく野宿しながら、「秋梨溝(しゅうりこう)開拓団」に何日目かに到着する事が出来ました。が、駅に行って見ると、構内には、日本人の死体が一杯。汽車は動いていないとのこと。乗れる日を待って、二十日間程、開拓団の何一つない空家で過ごす。食糧がなくなり、栄養失調や病人が続出し不安で一杯でした。

九月十二日頃、ソ連の将校が四・五人来て北満から避難してきた、「元軍人家族」「軍属(ぐんぞく)の家族」合わせて四〇〇人と共に元の「青溝子」に帰れと命令する。私たちが持っていた銃や刀は全部没収され、「青溝子開拓団」は、ここで解散となった。「吉林」・「新京」方面に行く者とに別れ、汽車もなく、徒歩で何百里と歩くこと。たどり着いても各避難所は満員で食べる物がなく、飢えと病気で死んでいく人が山のようと聞き、私達は四〇〇名と共にソ連兵の護衛の下、「青溝子」に戻る事になりました。理由は、畑や米の作物が実って九月・十月の初めまでに収穫すればみんな飢死にしなくて済む。四〇〇名の方々を助けることもできる。雪の降る迄に早く食糧の確保を、と怖かった道を戻る。途中、「額穆索(がくぼくさく)」まで来ると、八月の時には一面高い麻畑が今は倒れ、日本兵の死屍が二百体以上、衣服は剥(は)ぎ取られミイラ化していました。話しによると、奥地から退去してきた自動車部隊が、終戦も知らず、満軍と戦って犬死同然の悲惨な最期(さいご)となったそうです。この方達にも家族・妻子・恋人が居られただろうに・・・。悲しいやら、怖いやら・・・合掌

奥地に行く程、生きた心地(ここち)がなく、ソ連兵は私達を送りつけるだけで、帰りには、時計・指輪現金等隠し持っていた物を奪って

いった。幸い、作物は実り、荒らされておらず、団結して収穫を終わる。寒さや飢えには助かりました。毎日のように終戦を知らずに、山から下りて来る日本兵。飢えや病気、怪我をした人、弾が太ももを貫通し大きな穴が空き、ウジ虫がその穴を塞いでいる。薬もなく手当てもできない。私は、それを見て泣き、どうしてあげる事も出来ず、ハシでウジ虫を泣きながら取ってあげるだけでした。このように死に掛かっている人でも、日本兵と判れば、保安官が捕虜としてソ連軍に引き渡す。私達が隠してあげる事はできません。

ある兵隊さんの話では、山奥で、親にはぐれたのか、置き去りにされたか、幼児を何人か見かけたが、連れて来る事も出来ず、狼に食われるか、餓死するしかないと、一思いに、銃剣で刺殺してきた、と悲惨な状況を涙を流し話していた。この兵隊さんは、一生この事で、心が休むことがないのではと思う。

戦争の悲劇。開拓団員を奥地に送り込み、終戦になっても、国も連合軍も、何人も助けてくれない。私達を一応護ってくれるのは、赤い腕章を巻いた保安官。元匪賊や元満州兵でこの人が悪い事をする。女性はみんな丸坊主になり、男性に変身する。でも女と判る。夜は、身を隠す所を捜す。畑の中の摘草の中で一夜を明かしたこと。両親に銃剣を突きつけて、私を、手込めにするつもり。声も悲鳴も出ない金縛りになってしまう。両親は、これ以上ここに居ることは出来ない、早く脱出しようと言っていた。次の日、本部の丹羽先生が、満人の青年を連れて、父に「仲西さん、この青年が、娘さんを嫁さんにほしい。私に仲に入って下さい。」とのこと。連れて行かれてもおかしくない時代です。「二十歳」の中々好感の持てる青年でした。このまま、日本に帰れないかも知れないのなら、両親の事も考えると満州の厳寒を越す事は出来ない。私は、嫁に行く事を決心しました。彼は、「自分の家は額穆索です。花嫁衣装を持って改めて迎えに来ます」と言って帰った。それから三日後、再度、引揚命令が入り、「十月」の下旬、小雪が降る寒さに耐え、八・九月に通った道を行く。保安官に護られて。途中、額穆索の町を通らないと、どうしても秋梨溝駅に行けない。彼に道中、逢わないように祈りながら、ほうかぶりをして歩く。両親も心配で一杯でした。今思えば、あの青年は、きっと私達の引揚を知っていたと思う。日本に帰れるのなら、そっとしておいてやろうと、陰から見ていたのでは、と私は思っています。「人生の別れ道」

やっと無蓋車（むがいしゃ）に乗ることが出来ました。スシ詰め豚と同じそんな中で、出産する奥さんがいらして、それは大変でした。赤ちゃんは、無事生まれましたが、収容所で母子共、亡くなられました。吉林の収容所に入り、一部屋に四〇人程、やっと床に座れるだけ

で、足も伸ばせない。衣類は、シラミでいっぱい。伝染病が発生。栄養失調で餓死寸前、生き地獄です。一夜で、廊下に死体の山。冷凍人間が積上げられ、掘る事も難しい地面。自分の明日の姿かも・・・。死にたくない、死にたくない、日本に帰りたい、その一心でした。

生きていく為には、働かなくてはなりません。近くの家に、洗濯・食器洗い一日五円。(一食付)。満人の方は、私達に同情はしてくれますが、心の底には恨みもあります。

そんな中、私は子供として扱ってくれ、可愛がられ、次の仕事の世話もしてくれました。母が病気で寝込んでしまい、父は隠し持っていたお金で藁布団を買い、父が看病する。

私が洋服の仕立屋で働いて数日後、高熱で倒れた。伝染病に罹っていた。店のご主人は、自分達が看てやると行ってくれたが、親と別れているのが心細く、収容所に帰りたいと、無理を言って馬車に乗せてもらい帰ると寝込んでしまった。親切にして頂いたご夫婦の事は、今も忘れない。父は、母と私の看病で大変でした。医者もいない、薬も無く、ただ死と戦っている私達を見守るだけ。狭かった部屋も一週間・二週間すれば次々と亡くなり、広くなる。

私が少し頭を上げられるようになった頃、父が病気で倒れ、三日の患いで帰らぬ人となりました。私と母で「お父さんが、しっかりと元気になってくれないと、女だけで日本に帰れない」と励ましたが、父は「これでよいのだ。日本には帰れない。」夢破れた父の姿です。「お母さんと助け合って生きて行きなさい。」これが父の最後の言葉でした。「昭和二十年」、「十二月三十日」死亡、「五十一歳」。北山の山に埋葬して頂く。私も少しずつ回復「二十一年一月」末に、八統寮元満鉄の社寮に入ることが出来ました。土間でなく、アンペラが敷いてあり、風呂・毛布があり、六ヶ月振りに風呂に入ることが出来、やっと恐怖から逃れることが出来ました。でも、明日を生きる為に働かなくてはなりません。指がずるむけになる程の洗濯・タバコ巻き・皿洗いと、母の看病をしながら働いた。死から脱出し、少しずつ回復に向う四月、少し元気になった母と一緒に、父を埋葬した。北山の山に連れて行って頂く。建てた墓標はなく、野犬に食い荒らされた死体がいっぱい。筆舌に尽くし難い。この世の地獄。ここには、何千人という方々を葬っている。線香を立て、父や皆様の冥福をお祈りし、合掌す。

「昭和二十一年七月二十一日」、やっと待ちに待った日。収容所を出発、駅で一泊。二十四日引揚列車貨物車に乗り、スシ詰め状態で、三日間で奉天に着き、一週間収容所、錦門で一週間、コロ島から興安丸にて、「昭和二十一年八月十八日」、無事佐世保港に

着いた。開拓団の家を出て一年。やっとの思いで日本の土を踏むことが出来、きっと父が二人を見守ってくれたのでしょう。この「一年」が、「十年」も「二十年」もの歳月に感じられます。

大阪に嫁いでいる姉を頼って、汽車に乗る。母に白いご飯を食べさせたくて駅弁を買うと、何と中身は「オカラ」でした。落胆していますと、前の席の青年が、「引揚者の方ですか。本当にご苦労様でした。大変でしたね。」日本について初めて声を掛けて頂いた言葉です。袋から大きいおにぎりを差し出して「食べてください。」と、母が辞退しても、「その方が、私も嬉しい」と言って下さり、懐かしい白いおにぎりを両手の中に包み、人の心の優しさ、温かさを久し振りに感じ、涙がにじむ嬉しい思いをしました。結局、お名前をお聞きしても、駄目でお別れしました。何年間か経っていましたが、ラジオの尋ね人で捜してみようかと、母と話しながら、今まで実現できませんでした。思いは今も心の奥深く残っています。

大阪駅で降りますと、戦災に遭い、一面焼け野原でした。義兄が、伝言板に、私達が帰った時困らないよう、疎開先を書いて「お帰りなさい」と書かれていました。嬉しかった。

その日は構内で一夜を明かす。駅は孤児で一杯でした。家を失い、両親と別れ、食べる物もなく戦後一年も経っているのに手がつけられていない状態です。私達より哀れで、佐世保で頂いたカンパンを母はあげました。それ以上どうする事も出来ません。あの時の子供達、二・三歳の子は、今では六十四・五歳となり、みんなで幸せに暮らしておられるのだろうかと半世紀以上経った今も思い出します。

「五条駅」で下車。栄養失調の体でやっとの思いで姉の家に着き、お互い無事を喜び合い、帰る事が出来た嬉しさが込み上げる。その時、「母五十三歳」「私十七歳」「義兄三十四歳」「姉二十九歳」女の子が「二人」居ました。戦後の食糧難で大変な時です。母をお願いして、私は、美容師見習いで、住込みで働く事にしました。当時、坊主頭も十センチ程伸びており、若い娘ですし、恥じらいもあります。姉の古着を着て下駄履きで汽車に乗る。初めて見るパーマ屋は、十坪位の見た事も聞いた事もない店でした。この店は、義兄が責任者の先生を雇い、経営を始めた所です。私が引揚げて来た訳ですから身内としてお世話になって行かないといけない立場です。好きも嫌いもありません。これが、私の人生を助けてくれる天職となり、色々な事を乗り越えることが出来、幸せをもたらしてくれた運命的出逢いなのです。一生懸命、独学自習で努力し、国家試験も合格し、色々と苦労もありましたが、戦後のあの体験が、どんな事も乗り越えて行ける原動力となり、第一、今は、恐怖と死を考えなくてもよいのです。

嬉しい三男の復員、「昭和二十四年十一月」、シベリア捕虜生活

より帰る。母の喜びは大きかった。我子の帰りを待ちわびていた母です。長兄は南方で「二十四歳」の若さで戦死、次兄は中国で抑留されていました。兄嫁は、私達の一年後。子供を連れ、無事帰国。姉の子供を連れての引揚は、大変な苦労だったと思います。夫の帰還を待つ。「姉夫婦」が、母や兄の為に、市営住宅を与えて下さいました。私も、ここから姉の店に通勤し、やっと何年振りかで、親子で生活が出来たのです。兄は日雇いの仕事、母は針仕事で頑張り、「平和な日々」でした。

それも束の間、「昭和二十五年九月」に、「ジェーン台風」の被害に遭い、私達の住んでいた港区の堤防が破れ住宅が天井までつかってしまったのです。水は一週間も引かず、母も命拾いしました。堤防でテント生活を一ヶ月間。これで又、何もかも失ってしまいました。この時に、色々とお世話になった森脇茂さん。兄と同じシベリアからの復員で、兄とお友達でした。

台風がご縁となり、「昭和二十五年十一月三日」、「第二」の人生の出発です。何も無い者同志結婚。「主人二十八歳」、「私二十一歳」でした。ところが。結婚三ヶ月で主人が喀血。高熱が続き、ついに二百円の氷を買う金も無く、入院する事も出来ず。私の兄（三男）に相談し、苦労の末「上二病院」に入院できたのが「昭和二十六年二月」。検査の結果、「今すぐ手術をしないと、命に関わる」との事。主人の兄弟に相談し、お金を借りて手術を行なう事にしました。内容は、三回の手術で九本の肋骨を除去するのです。その頃、私の妊娠がわかりましたが、院長先生より「ご主人の体がこの様な時に子供を生む事は出来ない。諦めなさい」と言われ、私も親になる力ありません。辛い決断でした。当時の私は、次々と訪れる不幸に、この世に神も仏もないと思い恨みました。

誰にも頼ること、心配をかける事は出来ません。どの家庭も大変な時代でした。自分の人生は、自分で乗り越える。神が与えた試練と思い、暗闇に一点の光を頼りに前進しました。主人も二回目の手術の経過が良く、三回目は見送りました。大変な手術でしたが、よく頑張ったお陰で二・三ヶ月と経つうちに、起きて便所に行ける、生きていく自信が湧いてきました。私は、昼は美容室で働き夜は病院通い。最終電車で市営住宅へ帰り、暗い夜道、暗い家に着く。淋しい生活、あの頃は一体、何を食べていたのでしょう。思い出せません。この市営住宅は、主人のお兄さんが、結婚のお祝いにくださった家です。三年程で主人が外出できるようになり、府庁に人の手続きに行き、シベリアの捕虜生活で病気になった証明を、軍医の先生や上官の住所を調べ証明をして頂く事が出来ると、二人は大喜び。兄弟にお借りしたお金も返済し、肩の荷を降ろす事が出来ました。二人で心中を考えた日もあり、こうして乗り越えられて「死ななくて良かったね」。と語り合いました。

「念願の店」主人が退院してからの生活を考えると、私の給料だけでは生活は出来ません。自分の店を持とうと思い、三年間で二十万円貯金できたのと、叔父に二十万円お借りし、敷金四十万円、六坪の居抜きの店が手に入りました。これで生きていける、主人も養生できると安堵したものです。

「社会復帰」主人は、「昭和二十八年」に退院。丸三年の入院生活でした。この年に、「七年間」の中国抑留生活より次兄が引き揚げて参りました。初めて見る我が子も七歳になっておりました。父の顔も知らない子ども。嬉しいやら悲しいやら、義姉の妻としての喜びは筆舌に尽くし難いものでした。何と惨い「七年間」であったか・・・。戦争は我々家族にとって、終わってはいなかったのです。

その後主人は、年々元気になり病気一つしません。女の子を二人授かる事が出来、健康で親孝行な娘に成長してくれました。この間、昭和五十年、共に苦労してきた優しい母が、子どもと孫十一人に囲まれて八十二歳で他界いたしました。合掌

主人には、子供の世話、教育。店のスタッフ教育、対外的な仕事等をお願いしておりました。家族を大切に、大きな抱擁力で支えて下さった主人のお陰で幸せな日々が続いていました。「平成七年十月十七日」「七十二歳」で主人は帰らぬ旅立ちとなりました。突然の死は、悲しみも大きく、心に大きな穴が空き、悲しみを癒すには時間がかかります。

「平成八年八月」、「終戦五十年」、人生の区切りとして常々願っていた父と妹のお墓参りに、訪中を考え、父母が苦労して開墾した開拓団を訪れること、色々な思いが沢山あり、三男と一緒に訪中。父、妹の墓も五十年の歳月で、元の原生林と化し、白樺が大きく成長し、跡形もなく、異国の土となった父と妹ですが、これで思いを果たすことが出来ました。合掌

主人の一周忌と初盆を前にして、捕虜になるまで居た部隊海拉爾まで足を延ばし、汽車に乗りました。中国を横断、海拉爾内蒙古、遠い所までやって来ました。主人達が、最後まで守っていた陣地跡は、今もそのまま砲丸の跡も生々しく、深い深い地下壕に入り戦死なさった方々の悲しい声が聞こえてきそうでした。外は真夏というのに、豪の中は氷柱が出来、ツララが下がり、冷気が漂う。生前主人が話していました。多くの戦友、部下の死は、心から消える事がないと。私が思いを果たす事が出来、こうして心から、皆様のご冥福をお祈り出来ました事は、主人の供養にもなります。　合掌

内蒙古自治区ホロンバイル札欄屯海拉爾辺地は、まだ々残留孤児、残留婦人の方が、肉親探しの最中でした。「戦後五十年」経ち、日本人でありながら日本語が話せない孤児達。親に逢いたい、肉親に逢いたい人達が居る。この方達のお世話をして下さっている日本語の達者な中国人。日本語を教えたり、手続きのお世話をして下さったり、現地に行って色々な事を知る。日本がしなくてはならない事を。

私達には何が出来るかと心を痛める。主人の戦友の伊藤様は戦前、海拉爾で生活をしていて現地召集を受け捕虜となり、シベリアへ送られ、戦後家族は日本に引揚げられましたが、子供三人の内、三歳の女子が道中、行方不明になられました。伊藤様は復員後、中国文化大革命が終わってから毎年、子供を捜して訪中。定年になってから奥様も亡くなられ、退職金を投げ出して孤児の面倒を見られ、海拉爾でお世話をして下さっています。鬼和先生で、日本語教室と寄宿舎を作られ、私も協力支援を平成八年より八年間続けて居ります。今までに、五十名の孤児が日本に帰国し、永住しています。残留婦人の一時帰国の際には、受け入れのお手伝いをし、色々とお世話をさせて頂きました。皆さんは、最後は日本で死にたいと、悲しい思いで胸を痛めておられました。

「平成五年」「一九九二年」より「国際ソロプチミスト大阪―交野」奉仕団体に入会し、「一九九八年」より「札欄屯の日本語学校」に会として継続支援して頂き、「二〇〇二年」に会員六名で札欄屯日本語学校を訪問。孤児二世・三世の勉強を見学し、日本語の博和吉雅先生や校長先生皆様と交流を深めることが出来ました。謝謝々々で迎えられる。鬼和先生は、「平成一三年」にご夫婦で来日、日本に帰国した孤児達を訪ねられ、その際も十分お世話をさせて頂きました。朝日新聞にも記載されました。

「平成十四年」、モリワキ美容室の「創立五十周年式典」を迎えることが出来ましたのも、スタッフ又、お客様皆々様の支えがあり、ご支援のお陰で乗り越えられた歳月でございました。家族は皆元気で仲良く、助け合い、それぞれの任務を頑張っています。こうして一生懸命、前向きに走って来ました。「戦後六〇年」。色々言い尽くせない、書き尽くせない事は、まだまだ有ります。でも、過ぎた苦労は、今は良い思い出として、しかし

絶対、戦争は起こしてはいけない

戦争は、自然を破壊し人を殺し傷つけ
幸せを奪い悲劇と悲しみしか残らない
地球上の人々がみんな幸せになる権利がある
世界の平和こそ人類の幸福です
平和を　祈る

私の戦争体験（平和を願って）

矢寺好子（私部）

昭和二十年の終戦は私が国民学校三年生のときでした。私は私市に住んでいましたので、現在の交野市役所のところにあった交野国民学校まで歩いて通っていました。

交野には小学校が今の交野小学校と星田小学校の2校しかありませんでした。交野はすごく田舎でしたので、戦禍からはまだ安心だということで大阪市内から多くの児童が集団疎開に来ていました。その交野にも昭和二十年になってくると敵機が頻繁に上空を飛び飛行雲を何筋も吐き、だんだん空襲がきつくなってきました。三月には大阪に爆弾が投下され大阪市内の町は丸焼けになり、交野の方まで黒煙がたちこめ、西の空は真赤に染まり空襲警報のサイレンが鳴り響きました。空襲警報のサイレンがなると自分の家の庭に掘ってある防空壕に入り身をひそめ神様、仏様に無事を祈り、敵機が通り過ぎるのを待って、地上に出てきて、空を見上げる日々でした。防空頭巾は肌身離さず身につけていました。

毎日、ラジオで情報を聴き、学校へ行くのですが、途中で敵機襲来のサイレンが鳴ると防空頭巾を被り一目散で家に引き帰り、また家族で防空壕に入り避難するというくり返しの生活が毎日続きました。ある日のこと、学校から帰る途中、丁度今の『ＪＲ河内磐船駅』のあたり（ちなみに私市と私部の間は見渡す限り田園地帯で家は一軒もありませんでした）で、敵の艦載機にねらわれ友人と二人で歩いているところへ『シュー』と降りて来て、機関銃で撃とうとしたところ、目の前にどぶ川があり、その中に直径五十センチメートル位のコンクリートの樋があったのでそこへ飛び込み、一命をとりとめました。艦載機がまた上空に上がって行くのを確認して出て来た時には、口の中にどぶが入り、体中泥だらけで、泣きながら家に帰りました。祖母も母も、私を抱き抱えて「撃たれなくてよかったなあ。」と、泣いて喜んでくれました。

六十年前のことは今も私の脳裏に焼き付いて忘れることは出来ません。その時、撃たれていたら、今の私はいないのです。これを思い出すだけでも戦争はあってはならない。何の罪もない子どもたちまで殺してしまうのです。今もイラクでは戦争が続いています。子どもたちも日本の六十年前のように逃げ回っているのをみると、一日も早く戦争が終わり、世界中の人々が手をつなぎ、人権を守り、平和で安心のできる世の中になってほしいと願います。

満蒙義勇軍そしてシベリヤへ

渡邉芳治（倉治）

少年期

昭和の初期信州の片田舎で生まれた。

子ども達は皆着物（和服）を着て草履で遊んでいた。真冬でも寒風に吹かれながらも草履で継ぎをした足袋を履き、綿入れの着物の裾をはだけながら橇あそびをしていた。

本校の小学校までは六キロメートルぐらいあり、三年生までは一キロメートル程の分教場に通っていた。学校から帰ると学生服を脱いで着物姿となり、弟妹や近所の赤ちゃんを背負って家や近所の農家の手助けをさせられた。（女の子は学校に行くにもみな着物）本校に通う頃になると女の子も少数は服を着てたし、男の子は夜間以外は農事の手伝いも遊びも学生服だった。（ほとんどの子供が学生服しか買ってもらうことが出来なかった）

小学校一年生の教科書（読本）で、まず最初に「ススメ、ススメヘイタイススメ」と習い、大きくなったら兵隊さん（軍人）にと思っていたが、体があまり丈夫でなかったので学校の先生になろうと決めて、百姓を手伝いながらも一生懸命勉強した。

昭和十五年小学校卒業も間近に迫ったが、小学三年のとき父を、六年のとき母を亡くしたので中学受験を諦め、祖父母の農業を手伝いながら高等小学校に通い、卒業後農業学校受験にと希望を繋いだ。

昭和十七年卒業も間近の三ヶ月前、ついに決断するときがきた軍人（少年飛行兵）志願か満蒙開拓青少年義勇軍に入るか軍需工場しかなかった。家で農業を手伝っても軍需工場に徴用されるのが落ち。どうせなら日本男子として国のためにと心は揺れた。

十四歳の高まり

全面戦争下そうせざるを得ない情勢と、家庭の事情から進学をあきらめ、自ら義勇軍を志願した。志願したからには中途半端な覚悟では済まされなかった。故郷（日本）を離れ満州に骨を埋めるのだ。八人の友（同級生）は先生の奨めはあったにしろ「銃鍬とる戦士」に誇りをもって応募し、訓練所入所の日を張りきって待っている日々、俺だけの勝手は許されない。義勇軍を志願して満州に行く事が「国のためであり、将来の自分のためでもあり大きくは東洋平和の礎を築く事に繋がる。」毎日のように担任先生の言葉を何回も繰り返し心に刻み込み決意を固めようとした。

太平洋戦争に突入（昭和十六年十二月八日）してから三ヶ月華々しい戦果にも刺激され十四歳のまだ純な心は卒業も数日と迫った頃には義勇軍に行く事が最良の道であると思われたし、義勇軍

綱領の「身を満州建国の聖業に捧げ天皇陛下の大御心を案じ奉らん事を誓う。」も全身で受け止められ揺るぎなき信念となった。それでも銃と鍬を持ち大陸に巣立つ少年戦士としての誇りと故郷を離れる不安さとが交差し、少年の身では持ち余す言いしれぬものがあった。

病の床に付きがちの祖母、姉、兄弟は、義勇軍の志願は反対だった。むしろ身勝手さを怒っていたが、訓練所入所が迫ると戸惑いながらも送り出し準備に大わらわだった。

故郷の駅で

発車の汽笛。見送りの人々による日の丸の小旗の波。万歳歓呼の声に故郷を離れる不安も肉親との別れる淋しさも打ち消され、少年ながらも日本男子としての誇りに心は高ぶっていた。物心ついてから初めて味わう幸福感に満ち満ちていた。内原訓練所での酷なる日々、渡満後の苦難など思いもよらず十四歳の少年の心は純心そのものだった。

ソ連軍参戦

八月六日未明「非常呼集」で飛び起き、兵舎より出ると頭上に飛行機。日本軍の飛行機が飛んでいるのかとばかり思い込んでいたら、いきなり一斉の機銃掃射が始まった。夢中で散会地面に伏せた。機上より攻撃されて、ソ連機と気づき唖然とした。やが伝達があり「吾が隊は直ちに国境守備隊と合流。立山陣地に移動すべし。」陣地はソ連領が眼下に見下ろされる所にあった。関東軍五指に入る要塞とは名のみ、重砲、火器類はすべて南方戦線に持さられ迫撃砲二つと重機関銃一丁のみ、すでにソ連軍は承知済み。戦車が列をなしてゴトゴトと、しかも悠然と陣地を尻目に満州内部に向かって進入して行った。国境守備隊はソ連歩兵と一日間対戦したものの完全に取り残されてしまった。上官から十七、八の俺達にも酒と菊の紋のついた恩賜のタバコが十本ずつ渡され、

「お前達も短い人生と心せよ。今夜半、陣地を撤退し牡丹江方面で主力と合流、ソ連軍と交戦する。少量ではあるがこの酒と煙草をふかし悔いのない様、今後の作戦に体力つけてもらいたい。以上。」

陣地には営外等に居住していた将校の奥さんや子ども達も避難していた。（陣地外はソ連歩兵が）私は世話係を命じられた。夕方その場に最上官の中尉が来て「お前達も日本軍人の妻であり子である以上既に覚悟は出来ていると思うが、今夜半作戦上この陣地を撤去する一命を大君に奉じて来た今日、国家のため協力してほしい。そのためにこの要塞の奥で軍人の手足まといにならぬよう死んで貰う。」何たる事か自分の手で自分の妻子を殺すとは、戦争のため大君のためとは言えども余りにも無惨。三十名を越え

る命は何発かの手榴弾により遂に絶たれた。陣地撤退にあたり負傷兵はそれぞれ担架に乗せられていたが撤退とはいえ夜中行軍で昼は森や林の中に入って休み、その繰り返しでは負傷兵の看護もままならず、足手まといとなり遂に手榴弾を渡し、山中に置き去りにするを得なかった。

このようにして敗戦の波は容赦なくどんどん押し寄せていた。

敗戦ソ連抑留（捕虜生活）

生きる希望　ダモイ　ーシベリヤでー

帰国（昭和二十三年十二月）直後の思い出書きから

（一）！夢を見たのか？淡い記憶から！

何だか体中が押さえつけらてて動けない。だるい。

頭が頭が？・頭だけ、

どこかで体から離れた所でズキ、ズキする。

目が開かない　瞼を開こうとするが駄目だ

どうしても出来ない何処かで頭が重い

何処かで？　頭が　判らないそこらじゅうエライ　眠い

頭が？　あたまが　胸の上に乗ってる頭が重い

エラクだるい

体を残して頭が離れて行く闇の中へ夢を見ているのか？

だが頭が重い　疲れた　夢を見ているのだ

体から離れた頭が　ボーットして　浮かんでいる

疲れた　眠い　エラーク疲れた

ボンヤリと　何か白いような　動いている

薄暗いところで　見えたような気がした

白く動いている　頭が痛い　だるい眠い

手を動かしたら　手がだれかに動かされている

手を伸ばしたら頭があった

体から離れてた気がしてた頭があった

だが重くボーットしている　俺の頭だろうか？

白い　白いような何かが頭を　頭に何か

黒も　判らない　疲れた

（意識を取り戻してから目で物を追う様になるまでに五日くらいかかったようだ）

（二）！記憶が戻ってからの思い出し

（ほとんどが仲間から聞いた話との繋ぎ合わせ）！

一週間ほど前から体がだるく微熱があったが三七度以上無け

れば休むことは出来ない。その日は、特にエラク医務室にいった。休ませてくれと頼んだが聞き入れて貰えず、体温計を渡された。検温の結果は三六度九分で衛生兵（ロシア人）に当然のように作業行きを指示された。

（作業はチタ市（シベリヤの小さな街）の中心にある劇場の天井のペンキ塗り）

作業上の高さは一五メートル位、丸太棒を番線で締め付け組み立てた足場の上に、三十センチメートル幅の歩み板を乗せただけの簡単なものだ。

（三）！聴力回復後塗装作業の仲間に聞く！

銃を持ったロシヤ兵を前後に従えて？作業現場に、この頃から足元がふらついていたようだ。

現場に着き監督（ロシヤ人）に高所での作業は無理だから床面での軽作業をと強く要望したが監督が、ノルマ達成のために拒否し無理に足場に登らせた。このときには監視兵も監督に作業の無理を伝えたようだ。ふらふらしながらも丸太棒の足場をよじ登り材料や工具を綱で引き上げ天井に向いてペンキを塗り始めた。

三十分位して俺は「歩み板の上で立っていられない」と、仲間に伝え自分で降り場所のほうへ向かった。

作業中でそれからの事は仲間も見ていない、悲鳴を聞いて降り場の所に行ったときは材料を積み重ねた上に横倒しに成っていたようだ。病院からの車で運ばれたがその時、監督から熱があった事は固く口止めされたようだ。そして仲間の付き添いも認められなかった。

（四）！記憶にあるが儘に！

声が、喋ったつもりが声が聞こえない。

頭が　頭が重い　体中がエライ　何かが抜けるようでだるい

米嚼みの所が痛い　寒い　寒いが、どうしてか判らない

重い頭に　何かが付いている　何時も重く付いてる　疲れる

俺の頭に手を当てたり、肩をたたいたりして白衣の人が大きく口を開けて、何か言うてるようだが判らない、俺も口を、が、声が出ない。ぼやっとした頭の中に何回も同じような事が有った気が、だが思い出せない、目を開けてる事が出来ない、眠い、　瞼が重い　疲れた　夢を見てた、どんな夢かは思い出せないが、夢の続きかもしれない　何も聞こえず、目を開けるのが怖い、　だが目を開けた・・・・少しずつ見えてきた明かりが灯いている、　夢で？・・・見てた気のする、鼻の高い女医さんも看護婦さんもいる、窓も、外は暗いようだ。夜かもしれない。

ベットの上に寝てる、何故、女医さんが、病院のベット？

どうして・・・・判らない、女医さんに何か言いかけたが声が出ない。　大きく口を開けて呼んだが声が、出ない、呼んでるつもりだが　どうしてもこえが出ない、（呼び声が出た気もするが）何かの病気の所為だろうか？判らない　顔を向けた女医さんと看護婦が手や指を曲げたり伸ばしたりし、体まで動かしている、夢を見てるのか？　まだ夢の続きなのか？

（五）！仲間より聞く！

入院してから四〇度以上の高熱となり回帰熱と診断された、回帰熱は周期的に高い熱が出るので意識が朦朧としてる時が多く、仲間達も度々作業を抜け出して様子を見に来てくれたが声を掛ける事は止められてた。

入院から二週間目の頃、事故原因、傷病名書に書かれた「高所より墜落頭部強打、入院中回帰熱併発」の所に立ち会い者として署名（日、ロ、語二通）をさせられた。また譫言のように時々喋り出したのもその頃からのようだ。病室に来てくれた仲間にも何か喋ったとの事だが全く覚えてない。

（六）！傷病経過説明！

なぜ頭が重く痛いのか、体じゅうエライのか、どうして病院に居るのかも、何も判らない。ただ女医さんや看護婦がいつも手や指のしぐさで話掛けるのを、何でかと思い始めてた。また口を開けて喋れば（喋ったような気がした）声が出なくても相手に判るのも・・・・・・・・、だがロシヤ語は知らないので（単語は少し習ってたがその時は消えてた）喋る事はほとんどなかった気がするが、仲間の話では女医さんや看護婦には何かと喋ってたようだ。が思考力も少なく、音の無いのも判ってない時で覚えていない。割合と気分の良い日に女医さんが下手な通訳（ロシヤ人）と日本人（捕虜仲間、立会い者）を連れてきた。

女医さんの傷病経過説明が通訳され仲間が紙に書いて俺に見せた。『聴力神経障害により右耳聴力回復不可能、左耳聴力回復可能小、他に脳神経障害による後遺症可能性有り』のような事が書かれてたようだ。文字は読めたが考える気力がまだ無かったので書かれた意味も理解出来なかった。メモは枕元に置いて女医さん達は病室を出た。

（七）！ダモイか？死・か？！

「日本に帰っても聾では生きて行けない、両親も亡い・・・」

気分の良い日が多くなり、あれこれと考える力も日増しにつき、シベリヤの病院に入院している捕虜の身で有る事も、周囲の状況や仲間の話などで自覚出来てた。そんな時枕元の台の上にあるメモ紙が目についた。

何回も、なんかいも読んだ、短い文句だがジット見つめ文字を確かめながら、そして理解出来た・・・・弱い頭で悩み悩んで眠れない夜も続いたが、思いが死に到達し、気も楽になりすっきりした。　〈思い出したくない、書けない〉

（八）！生きる希望　ダモイ！

頭が重くボヤーットしているが回帰熱による体力減退はほぼ回復した。

メモに残された傷病経過説明の「左耳聴力回復可能小」も・・・アノ事・・・のあとでロシヤ側から急遽派遣された日本人医師，（捕虜・元軍医）により通訳の誤訳で「左耳聴力回復可能、回復後難聴小」だったと知った。聴力検査も意識回復後に何回も行われ、そのデーターに基づいたかんさ結果だから間違い無いと説明もあったが、アノ・・心の傷から立ち直るまでの期間は長かった。

年が変わり後遺症のテンカン症状に悩みながら、聴力回復訓練（聴力神経の刺激に楽器なども使われた）は続けられた。

機能訓練の結果喪失してた記憶も少しずつ戻り、それと共に聞こえるようになり、話してる自分の声も聞こえた。

耳は聞こえる（左耳だけだが）、話もできる、日本に帰りたい、生きて帰りたい、治療に専念して元気な体で帰りたい。

（当時一九歳）

生きる希望が出来てからの回復は早く六ヶ月後に退院、一年後舞鶴に上陸故国の土を踏んだ。　（後遺症は完治せず、左耳にも障害は残った）

追憶

＊記憶喪失で思考力も無かったのに、意識が戻ってから自分を見つめる事の出来る迄（ただ生きていただけ）の期間の記憶は本当にその時のものか、感じたり思ったり、出来たのか？・・判らない。

＊！アノ時・・・・！、の件と以降の闘病記は何時の日か書きたい。

藤田茂夫さんの語り

出身地は伊賀上野で、引き揚げ後、大阪市内に住みその後交野に移転、約五十年が経つ。軍隊に行く前は満州へ奉公に行って新京で兵隊検査を受けて現地で入営しそのまま終戦を迎えた。

終戦で捕虜になった。こういう状態になったことは当時の流れで仕方がないと思っている。商業学校を出るなり、自分で働いて食べなければならないと満州へ奉公に行ったが不幸な戦争に巻き込まれた。その当時は、戦争に巻き込まれたことなどは頭になかった。当たり前だと思っていた。みじめな捕虜生活・恐ろしい剣つき鉄砲で突かれたりしたが何も言えないこともあった。精神的に弱くてそのまま死んだ人もいた。早く順応でき、みんなで渡れば怖くないというような精神、自分だけが遣られているんじゃなくてみんなで集団で遣られているんだからその中を、自分だけ一人が逃げ出すわけのはいかず、大きな流れでこうなったのである。

振り返ってみて、余り過去を振り返るのは好まない。過去は全部忘れてしまった現在では、前と同じ轍を踏まないようにと頭には残っているが、過去はこうだったとか余り言わず現在を前々に進んで帰ってからも職業もなんでもよい自分で働いて食べられたらいいと誓ってきた。あの思想は嫌とかは余り言わずに現在まで悪い方へ行かず思ったことが開けてきた。八十三歳までくれば、惨めなことは考えなくていい、食べていければいいという形です。苦しいこともあった。今の若い者は、そういうものに勝つ、勝っていこうという精神を持って欲しい。直ぐに人に当たり、悪いことをしたり、盗んでみたり・・・。

親によく言われた。後ろに手が回るようなことは絶対にやめとけ、家族に関係してくるからと。

思想的のも共産党とか色々あるが、シベリヤで共産党の講習を受けた。受けなければ帰国できないから、一日八時間労働の替わりに一ヶ月程の講習を受けた。引き揚げ後、ＣＩＡに呼び出され共産党の講習会について尋ねられた。受けなければ帰国できないので受けただけと答えた。

今の若い人は精神的に弱い。少子化になっているので親が甘やかすのか、一人の子どもを「いいわいいわ」で甘やかす。

私は八人兄弟の中で成長した。親とりも兄が躾をしてくれた。また庇ってくれた。外へいって友達に殴られたら兄が行ってうちの弟に何をするにかと逆にやられるから兄がいる間は友達に泣かされるということはなかった。しかし、家では兄に殴られたり、勉強ができないと「物差し」で叩かれたりして成長してきた。職業は親・兄から丁稚奉公に行け、自分で稼いで食べよと言われた。当時、職業はどうのこうのと余り言わなった。今はネクタイを締めて行ったらいいとか、作業服着ていったらとか・・・それ

らはなかった。
引き揚げ後、ＣＩＡから調べがあり伊賀上野の警察から通知があり日当付きで津警察署へ行き抑留生活についての思想・講習の受講について調べを受けた。
戦争はお国のために、徴兵で行って鐘や太鼓で送られ入隊した。別に自分では悪い事をしているわけではなく、堂々として行った。
米国に負け終戦になり、当時は今後どうなるかも分からなかった。当時ソ連との国境周辺の飛行場に勤務していたので今まで日本の飛行機が発着していたのをソ連の飛行機が着陸してあれっと言う感じで、ソ連が来たでと・・・その日から一変して向こうの言葉が分からんので剣つき鉄砲で（怪しいかったら）マンドリン（短小銃）でパパーアンと撃ってくる。言葉の行き違いで犠牲者も出た。別に乗り切る、乗り切らんというより精神的にそうせざるを得ないようなパニックみんなで言うことを聞いていればよいという形だった。
復員五年後、大阪の薬品会社に勤務し仕事に関する種々な資格を取得した。

藤田茂夫さんの雑談からの抜粋

・三年間の捕虜生活のうち二年間はほとんど作業だった。六時に起床し、八時から十七時まで作業した。夏の暑い日、寒い冬（零下三十～四十度）の日も作業現場へは歩いて通った。

・「洗脳」は三年目からでソ連の憲法（共産主義）のようなものを習ったら帰国出来るということで八～十七時、交替で受講した。洗脳教育期間はほぼ一ヵ月だった。

・洗脳教育は強制でなく、ソ連から指名された者が受講した。

・食事は洗脳教育期間中も収容所の皆と同じで、昼の労働などは違っても夜はともに過ごした。

・作業は最初の二年間は機関車工場と農場だった。機関車工場の作業は、掃除をしたり、後片付け、鉄板の運搬などの雑役。農場の作業は除草、種芋を蒔いたりなどした。機関車工場のときは、食べ物がなかったが、農場勤務の時は育った野菜などを休憩時に飯盒で炊いて食べたりできて良かった。

・最後の一年は炭坑勤務だった。場所はソ連中央周辺の（クラスノヤルスク）の炭坑の現場はエレベーターで地下二〇〇㍍まで降りる竪坑だった。八時間労働の三交替だった。

・帰国後、米のＣＩＡから津警察署へ呼び出しがあり、ソ連の洗脳教育受講について、何のために受講したかなどを問われた。早く帰国したいから受講したと答え、一日だけで終わった。

・日本への帰国の条件は病気になった人も入っていた。洗脳教育を受けたから優先的に帰国できたかどうかは定かでない。共産党は一国では無理、世界的な共産主義は成り立つとの教育を受けた。共産主義を拡大するために洗脳教育をしたのではないか？

・ソ連労働者にはノルマがあったが、農場労働の我々には課せられなかった。除草作業で日本捕虜集団は「早く終わろう」と個々に競って作業したが、ドイツの捕虜集団は遅い人に合わせて作業した。

・異なる国民性を垣間見た。

・戦後は上下（使従の関係）はなく、一ヶ班約二十人程度、各班には、班をまとめる連絡役として班長が存在した。

・満州からソ連へ移動するまでは殺されるという不安があったが、ソ連国内では重労働をさせられたがすぐ殺されるということはなく、生きていれば大丈夫と思っていた。

・一番がっかりしたのは、満州から黒竜江を渡りソ連領に入ったとき、日本軍がソ連国境に作った塹壕を、これからお前達が壊しに行くんだ、壊したら帰国させてやるといわれたが、塹壕もなく列車『有蓋貨車（一車輌に二十～三十人乗載）』の進行方向など分からず不安だった。

・栄養失調で三分の一くらい死亡者が出た。
・収容所の増設作業には技術を持つ人を使っていた。屋根葺きの板金工は外に仕事に行かず所内で仕事をしていた。
・ナホトカに着いて帰還船に乗るまではソ連の（悪い）ことを「喋るな」と注意を受けていた。
・厳しかったソ連抑留のお蔭で、それ以後の人生にプラスになった。何事にも負けない精神力・根性ができた。
・日本はもう二度と、このような過ちを繰り返してほしくない。
・今の子どもたちに戦争と言っても分からないのではないか。鉄砲の打ち合い、その中に入れば死ぬということが分かっていない。
・イラクのように、テロなどで死んだ人を見て「死んだなぁ」という程度で、実際に自分が弾の下を潜らなければ分から無いのでは無いか。
・痛い目に遭えば身に染みて分かると思う。自分自身の痛みが分から無いから、やたらにすぐ人を刺すようになっている。
・今の人は我慢が足りないのかもしれない。
・最近の殺人の多いのには呆れる。
・戦争はともかく、国内で通常の生活が安心してできるようにしたい。
・昔はカギなどをかけたことはなかった。今はカギをかけていても賊は叩き割って入ってくる。
・今の子どもたちは、一人では生きられないことが分からない。
・子どもに物を与えすぎだ。
・子供の時は学校から帰ると低学年でも子守した。子どもを背負って遊んだ。
・復員のときの交通費は出た。父が伊賀上野駅まで迎えに来てくれた。母がいないので尋ねたら、すでに死亡していた。
・当時使用していた兵器、十一年式機関銃・三八式小銃・九九式小銃など。

Q　怖い時、何を思ったか？

・思う余裕ない。怖い恐怖だけ。

松田珠次さんの語り

満蒙開拓義勇軍として昭和十七年三月に「内原(うちはら)訓練所」に入所しました。かなり絞られました。絞られることが如何に苦しいか、充分体験してきました。その時私の中隊が内原の訓練所で、準幹部(じゅんかんぶ)といって第一次義勇軍が現地で教育を受け、内原訓練所へ帰ってきて幹部候補生として養成されていました。その人たちを現地帰りと言っていました。その準幹部とあるイザコザから大喧嘩になり、私たちの和歌山中隊は解散して帰ろうと内原の駅まで行きましたが、引き戻されました。当時の中隊長は中田さんでしたが辞められて、大隊長の横矢(よこや)さんが「和歌山中隊が事件を起こしたのは具合が悪い」といって自分が中隊長になられました。

内原訓練所での教育期間は約三カ月～四カ月ですが、我が和歌山中隊は事件を起こしましたので一年間残留させられました。一年後の昭和十八年三月に満州へ渡りました。その時はまだ雪が深く積もり、電車から降りて三時間かかって目的の大きな訓練所に着きました。

中隊はこの訓練所で一年間農業訓練などの指導を受けました。昭和十九年十九歳の時、特例として徴兵検査を受けよの命により受験、甲種合格になり関東軍に入隊しました。

関東軍に入ってからも絞られました。義勇軍時代からすでに俺達の人権はどうなっているのか、そこまで私たちは考えませんでしたがこれが当たり前だとしか思いませんでした。そういう経験を踏まえて六カ月間の訓練を受けて戦闘配置につきました。当時関東軍支配の北朝鮮近くで陣地構築をしている最中に終戦になりました。実戦はしていませんが強いてやったとすれば一週間くらいです。

終戦後はソ連に拘束されて北朝鮮で収容されました。さらに貨車に乗せられて移動しました。その移動中に非常に大きな死亡者がでました。千人のうち生存者は半数以下の三〇五人、死亡者六〇五人の大犠牲者がでました。私が一番初めに発疹チフスに罹りましたが当時まだ若く体力があり、もちこたえて目的地に着いた時は四〇何度の熱を出していました。途中の貨車の中で看護してくれた四国出身の小松さんが、「小松君水飲みたいなあー、咽喉が渇くよ」と私が言うと「よっしゃ、今度汽車が止まったら雪をとってきて溶かしたるわ」といい、雪を溶かしてもらって飲んだことを憶えています。その後、自分がどういう状態だったか全然憶えていません。そのお世話になった小松さんは目的地に着くまでに死亡しました。貨車の中でも右・左に寝ている人が死んでいました。貨車から降ろされて約七〇〇人の遺体を埋葬しました。

埋葬といっても雪を掘り雪の中に遺体を埋めただけで、その人たちはその後、一体どうなったか知る由もありませんが、当時人間なんていうのは問題ではなかったように思います。

日本へ帰るということで午前三時ごろ、船に乗れと命じられ船に乗りましたが、方向がさっぱり分かりませんでしたが夜明けになり太陽が昇り始めて我々が北方向に進んでいることが分かりました。日本へは帰れず着いた所はナホトカでした。それから列車に乗せられて約一カ月かかってモスクワの東部に着きました。いろんなことを経験しました。目的地ではケガ人は出ても死亡者は出ませんでした。しかし、寒い中での作業は大変なものでした。日本の管理下では零下三〇度以下では外へ出られませんでしたが、捕虜の私たちは零下四〇度でも作業をしました。幸いにもケガもなく過ごしました。

今度こそ日本へ帰れると思って列車に乗りましたが、いま大統領選のやり直しで問題になっているウクライナの東部に到着し、炭鉱に六カ月間労働しました。炭鉱でもどうなるのかなあー、今度は死ぬのかなあー、と不安でしたが、何とか生き延びてきました。若い頃の人権は守られるどころでなくて、踏み躙る(ふみにじる)という感じですね。

日本へ帰ってきたのは昭和二十四年八月でした。内閣総理大臣の竹下登さんから「ご苦労さん」でしたと賞状一枚頂きました。人権というのは、どうやれば守れるのか、いまでも日本の国・日本人は騙されていると思います。これを皆さんに訴えたいと思います。あくまでも戦争は勿論のこと、また戦争をしようとしているが、それが明らかに人権を完全に踏みにじっています。だからどうやって人権を守ろうということは、やはりこういう苦労をしてきた我々でないと本当の平和というものは望めないと思います。

皆さんの温かい気持ちで本当に日本の国民がこれから過去のような悲惨がないように団結して生きたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

渡邉芳治さんの語り

交野へ来たのは昭和二十五年くらい、大阪へ出てきたのは二十三歳。城東区に住んでいて、二十五年前に交野市へ移転して交野市民になった。

シベリヤで三年間抑留生活。昭和二十三年に引き揚げ、長野県庁で共産党に入党した。抑留中に作業で怪我をし障害者になった。希望もなかったが、生きて帰られたということで引揚者を迎えるための準備の会に入り、二十四年以後の引揚者を迎えたり、それらの対策・対応した。

大阪に来る前に（共産党内で志賀義雄・宮本顕治両氏の論争があった頃）共産党を脱党した。公安調査庁係員に付き纏われたこともあった。

長野県にいた時は、殆ど引揚者の支援に回っていた。折角帰られたので、少しでも人のために尽くせたらと思っていた。長野県で、引き揚げ関係の本の編集・刊行などの手伝いをしていた。大阪へ来る前からある程度、障害の症状が固定化してきたので松下関係の会社に入る。その当時からボランティアしている。

終戦当時はソ満国境にいた、通訳の手違いで「電気屋」が「ペンキ屋」になってしまった。捕虜でも特殊技術者は優遇された。技術者ノルマは良かった。劇場の高いところのペンキ塗りの作業で、最初は、その日は熱があって行けないと言っていたが監督（ロシア人）にノルマの完遂のため、無理やり労働を強いられた。当時は丸太の足場で、気分が悪いから自分で降りようとして途中で落下してしまった。下にペンキの材料が積んである所に落下した。意識不明になり病院に搬送され（マラリヤも併発）高熱で入院した。気がついた時は両耳が聞こえない容態であつた。看護婦と女医（中尉）さんに良くしてもらった。

女医さんは戦争未亡人で、モスクワに子どもがおり、良くしてくれた。命助かって帰国できた。色々な人がかなり戦争で死亡したり、そういうことを実際に見てきているから敗戦のショックは割合なかった。若かったかもしれない。いろいろな人に助けられたので、帰国後は何か役に立つことをして生かしてもらおうと思っていた。

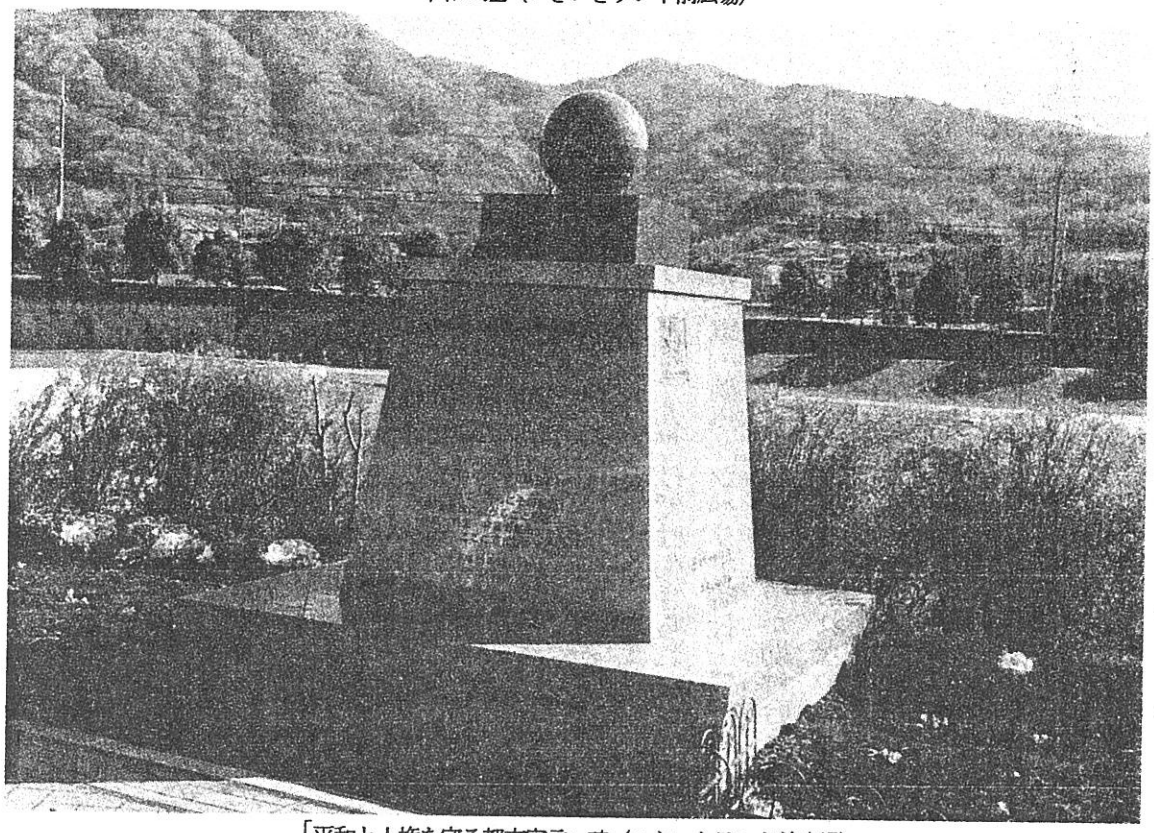
いろんな苦労もしたが敗戦のショックはなく、頭の切り替えも早かったのかも知れないし、若さが跳ね返したのかも知れない。後遺症も余りに出ず安定していたせいかもしれない。

雑談からの抜粋

・全然予想つかなかったがいつかは帰国できるとは思っていた。
・山の中へ入り伐採作業もした。
・捕虜も人民委員会（警察関係）と国民委員会（軍関係者）に大別され国民会議派の捕虜は優遇されたようだ。
・酒の配給はなかったが、煙草は配給があった。新聞紙でタバコを巻き喫煙した。
・タンポポ・オバコも食べた。
我われ捕虜の中で語学力のある者が通訳になった者もいた。我われは日常生活的な会話ができた。
・収容所内では演劇もあり流行歌も唄いお互いに心を癒やした。
我われは建築特殊大隊で編成されチタ市で建設作業を二年間やっていたが、技術者はある程度優遇されていた。一、二級建築士などは優遇された。我々はペンキ工だったが一般人より優遇された。ノルマを完成したら報奨金を支給された。洗脳された人たち（アクチーブ・グループ＝洗脳されて活躍している人々）はある程度貰っていた。
・折角ナホトカまで来て引き返された人もいた。
・昭和二三年十二月帰国後、集団で共産党に入党した。
・体験談を語れば関心を持ってくれるが、実際にどれだけ理解してくれたかは分からない。
・子どもたちは体験談をゲーム感覚で聞いているように思える。
・映画・テレビなどのドラマで死んだ人（俳優）がまた明日の別のドラマ・映画に登場するから死ぬこと自体が分かっていない。イラクでも死んだ人が次の日生きているような感覚で……。これもテレビなどの影響かも知れない。
・東京・大阪大空襲のときも、みんなが目の前で死んでいく人を見てきている。悲惨な死を見てきた人は命の大切さを強く感じるものだ。今の人はすぐ自律神経失調症になってしまうのでは？
・今の人は「喧嘩」の仕方を知らない。
・自分は生きているけれど、一人だけでは生きられない。皆がいて自分があった（義勇軍・満州・シベリア時代・帰国後）環境がいくら変わっても自分が生きる気持ち、皆が助け合えば生きられる。　今の子どもたちは一人では生きられないことが分からない。子どもに物を与え過ぎだ。我われの世代は駄目で我われがこれだけ苦労したから、子どもを少しでも楽にさせてやろうと育ててきた。子どもの子どもが今の子どもだ。親がそうだから親に甘やかされ育ったのでその親は戦争中苦労しているから子どもに苦労させない、その親に育てられた孫がサッパリだ。とどのつまり我われが悪かった。（一般的にも）

交野の平和と戦争関連モニュメントから

平和の鐘（いきいきランド前広場）

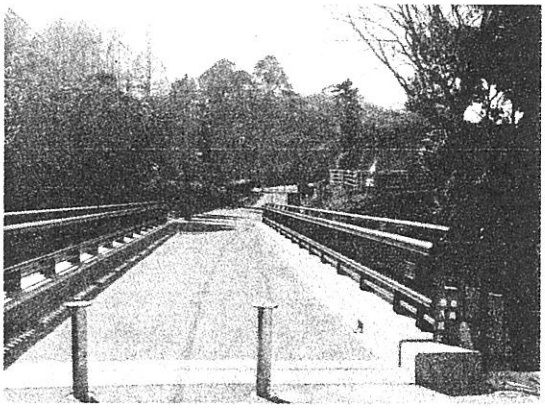


「平和と人権を守る都市宣言」碑（いきいきランド前広場）

戦闘機「飛燕」発掘物展示（いきいきランドロビー）

中村中尉鎮魂碑（星田北６丁目）

片町線陸軍専用香里側線跡（星田北）



私市興亜拓殖訓練道場跡（大阪市立大学理学部付属植物園）

桂木斯小学校記念碑（平和台霊園内）

忠魂碑（私部会館横）

交野市原爆被爆者の会「祈念」碑（ゆうゆうセンター前庭）

「愛と平和」碑（ゆうゆうセンター前庭）

平和と人権を守る都市宣言

あなたの強い願いがあるから
きっと　核や戦争はなくせる

あなたの暖かい愛があるから
きっと　差別や虐待はなくせる

交野のこころは「和」
「平和と人権」はその命

かけがえのないものを
あなたと共に守り抜きたい

そして　さらにその輪が
全地球に広がることを念じ
『非核・共生・非暴力都市　かたの』
を　ここに宣言します。

平成 13 年 11 月 3 日

交野市

City Declaration on Observance of `Peace and Human Rights'

With our strong will,we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is "WA" or "Peace."

The desire for peace and the respect for human rights are at the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby declare Katano to be a "Non-nuclear, abuse -free city with compassion for all humanity."

November 3 r d, 2001

City of Katano

あとがき

太平洋戦争終結六十年の節目に当たり、戦中・戦後を生き抜いて来られた交野市在住の方々の中で、国内のみならず、国外で体験された苦難の道のりを有りのままに、文章や聞き取りで告白して頂きました。

一人ひとりの悲痛な叫びが響いて参ります。

この文集は単なる「よみもの」で終わるのではなく、後世の人々に戦争の悲惨さを知り「平和の尊さ、生きる生命の喜び」を感じ取って頂きたいと思い編集致しました。

あらゆる場で、この文集が平和教育の一環として用いられるならば、この上ない幸甚に思います。

最後になりましたが、原稿の寄稿・聞き取りにご協力を賜った方々に篤くお礼申し上げます。

編集者　平和継承事業部会

編集委員　可児　義明

〃　水上　隆邦

〃　大東　幸雄

〃　川端　藤男

〃　森脇　登美子

事務局　樋口　和美

『平和の礎（いしずえ）』

―交野市在住者の戦争体験集―

平成十七年十二月発行

発行者

交野市『平和と人権を守る都市宣言』を進める実行委員会

交野市私部一丁目一番一号

電話〇七二―八九二―〇一二一

印刷　株式会社　加地

電話〇七二―八九二―〇〇〇一